

語りつぐ

中沢の三六災害

あれから50年



三六災害50周年編集委員会

1961
|
2011

語りつぐ三六災害

昭和36年6月下旬、伊那谷(中沢)は梅雨前線により1日400mm以上の集中豪雨を受け、新宮川、百々目木川とその流域、新宮川岸がガレキと土石流の河原となった。死者5名、家屋流失119戸、道路、橋梁、堤防、新宮川発電所、農地等の流失、山林の崩壊は数え切れず、被害総額約31億円に及び中沢250年来の大災害だった。

平成23年はあれから50年、この年3月11日、東日本大震災長野県北部・栄村大地震、大津波、原発事故等の大災害が発生した。

私たちは此の様な大災害から多くの事を学んだ。

支え合う、助け合う、励まし合う、強い絆、広く多くの人々からのあたたかい支援の心、感謝の気持ち、皆が心を一つにして取組む、復興への心、二度と起こしてはならない災害への強い取組み。

中沢の歴史の中で最も悲惨で中沢を大きく変えてしまった三六災害の記録を、当時何らかの形で関わり合った人達と公民館がここに「語りつぐ 中沢の三六災害」として発刊することが出来ました。この一冊が、中沢や駒ヶ根市が災害のない平和で安全、安心、住み良い地域づくりを思う人たちの心に残ればと思います。

語りつぐ 中沢の三六災害 あれから50年

Contents

目次

三六災害洪水はん濫・土砂災害の現状 4

第一章 三六災害の写真記録

- 一節 尊い命を奪った上割北洞地籍 7
- 二節 上割落合、南海は壊滅的打撃を被った 14
- 三節 百々目木川流域は甚大な被害を被った 18
- 四節 四徳の惨状 28
- 五節 中割矢台線から桜渡地区、大津渡橋付近 29
- 六節 本曾倉、下割地籍の住宅、水田、橋梁流失 32
- 七節 被災によって新宮川岸の様相は一変した 35
- 八節 駒ヶ根市長の陣頭指揮と有線放送の活躍 43
- 九節 救援に駆けつけた自衛隊 47

第二章 災害時の気象と地域は

- 一節 三六災害時の気象状況 51
- 二節 災害を語る 53
- 三節 災害当時の有線放送電話施設 57

第三章 災害状況と災害がもたらしたもの

- 一節 自衛隊の救援活動 61
- 二節 中沢簡易水道 63
- 三節 新宮川発電所 その歴史と災害 63
- 四節 三六災害の被害状況 64
- 五節 三六災害で中沢から移住された方 65
- 六節 三六災害時の家屋と移住された方 67
 - I 新宮川岸(原第二・原第三)下割の一部 67
 - II 上割 北洞 大洞 68
 - III 上割 北洞 南海 69
 - IV 上割 北洞 落合 70
 - V 上割 南洞 桃ヶ平・早草 71
 - VI 上割 南洞 百々百木川 72
 - VII 上割 南洞 大坪・中曾倉・道平橋 73
 - VIII 本曾倉 下曾倉 下割 74
 - IX 村を変え、農業を衰退させた三六災害 75
 - X 三六災害と交通 76

第四章 三六災害を語る

- 濁流 昭和36年
 - 水難記 中沢小学校 78
 - 死線を越えて
 - 中沢東分校 81
 - 家を流して 中沢小六東 82
 - あれはてってしまった田畑
 - 中沢小六西 84
 - ナギ 中沢南分校先生 85
 - 山へにげた 中沢小 四東 86

- 谷あい3号 昭和37年
 - 希望をもって 下割 88
- 石楠花5号 昭和37年
 - 救援物資配分奉仕にて
 - 永見山 89
 - 集中豪雨をあびて
 - 永見山 90
- 石楠花6号 昭和38年
 - 災害後二回目の年末を迎えて
 - 下割 91
- 溪声36号 平成23年
 - 三六災害におもう
 - 原 92
 - 「山津波の岩石と泥の海を体験して」
 - 赤穂 小町屋 94
- 谷あい51号 平成23年
 - なつかしき古里
 - 赤穂 上赤須 95
- 三六災害から50年 平成23年寄稿
 - 今も忘れない山津波のおそろしさ 平成23年
 - 赤穂 町二区八町内 97
 - あれから50年 平成23年
 - 赤穂・市場割 98
 - 有線放送本部の状況 平成23年
 - 赤穂 町三区 99
 - 中沢 永見山 99
 - 赤穂 町二区 99

第五章 三六災害50年のまとめ

- I 災害に備えて
 - 駒ヶ根市長 杉本 幸治 100
- II これからの地域防災力の向上をめざして
 - 蒲原天竜川上流河川事務所長 蒲原 潤一 101

第六章 災害から50年の中沢

- 美しい中沢の春 102
- 災害から50年の中沢地籍 104
- 写真及び資料提供者 109
- 三六災害50周年記念誌編集委員 109



今から 50年前(昭和36年)
中沢の谷間を襲った梅雨前線豪雨災害
1時間に40mmの大雨により山里の
集落はことごとく土石流に流された

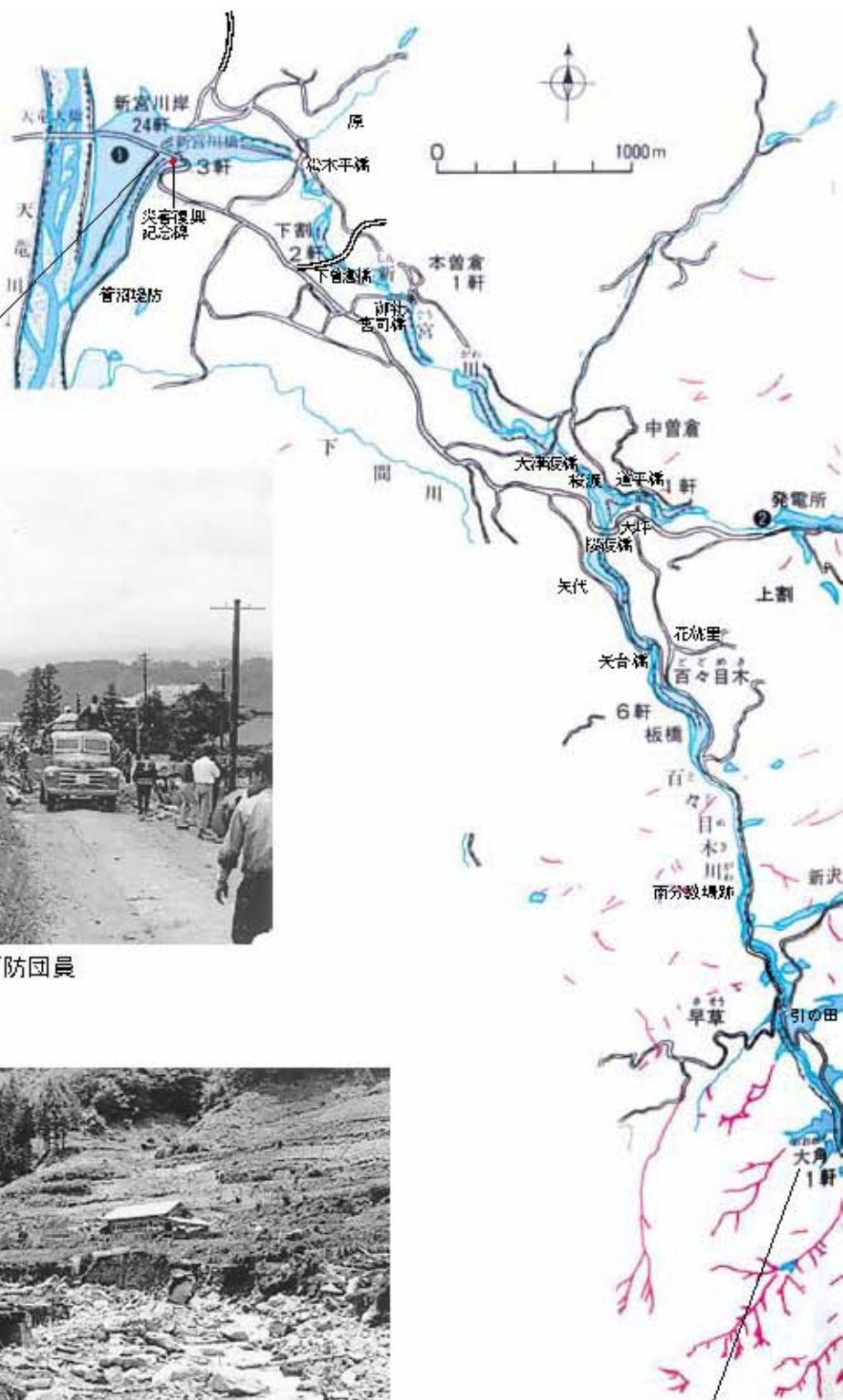


中沢地区大運動会

中沢地区は伊那山脈にいだかれ
北より高鳥谷山・戸倉山・大松尾山・陣馬形山
峠は宮沢峠・二越峠・新山峠・女沢峠
中沢峠・祠峠・折草峠
谷間を流れる中曾倉川・大曾倉川・新宮川
百々目木川・下間川
そこに流れる小さな支流が多くあり、
1時間40mmを越える大雨が降れば
三六災害に匹敵する災害が発生する可能性があります。

あなたの備えは大丈夫ですか。

三六災害洪水はん濫・土砂災害の現状



新宮川岸



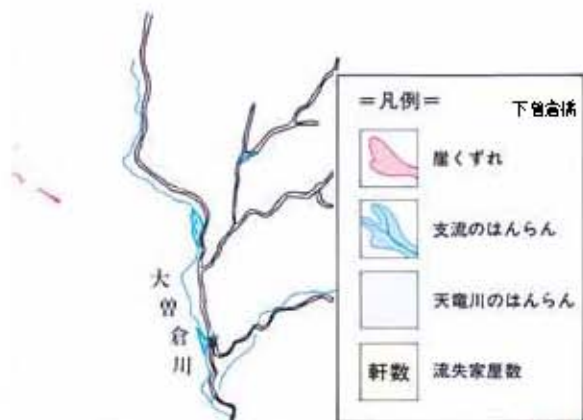
新宮川の濁流と土のうを並べている消防団員
新宮川橋は流失して無くなっている



大角



大洞



南海





落合の全景(昭和10年代)

落合の集落と奥に李平、大洞が見える。中央部の山の斜面は石灰岩の採掘現場。
三六災害にて川沿の家はすべて流された

第一節 尊い命を奪った上割北洞地籍

上割の北洞は大洞、唐山、猿沢、馬羅、李平、大日方(中山)からなっていて、大洞川、唐山川の土石流で一夜にして李平は河原となってしまった。大洞の■■■さんの家が濁流にのまれて尊い命を奪うこととなり一家5名が犠牲となった。歴史に刻まれた忘れることのできない悲惨な出来事だった。

北洞には災害前24世帯と多賀神社があって、お祭りなど盛大に行われていて「地域の交流が深かった」と当時の居住者は思い浮かべていた。無住地となった山懐をお多賀様がひっそりと鎮守しているようだ。



唐山川合流地籍では現在も治水事業が施行されている。居住者の居なくなった上割北洞地籍。当地籍には20数世帯が居住していて当時の山里の生活を偲ばれる



■■■氏宅(■■■)は道路と大洞川のちょうど中央にあって氾濫の道筋になってしまった。変わり果てた姿に唾然とした



大洞中心部より上方を臨む
…**氏宅** () 他、
耕作地は流失して農耕は絶
望的だ



氏宅 (), 手前の土蔵に避難し
たことが命取りとなってしまっ
た。7人家族のうち5人が尊い命
を失って、忘れることのでき
ない痛ましい出来事だった



一瞬にして5人の命を奪った**氏宅** ()。犠牲者の搜索をする自衛隊員

大洞の災害前の■■■■氏宅(■■■)は多賀神社の階段入口の向い側にあつて、道路から大洞川の橋を渡るとそこが実家だった。土蔵、水車小屋、山羊小屋等があつて、のどかな山里の住まいだった
(流失前の写真)



大洞の■■■宅(■■■) 軒先が崩落したものの本宅、土蔵、畜舎は無事だった。「住み慣れた大洞から離れたくない」と固持していたが親戚の説得に屈して集団移住に従うこととなった。赤穂へ移住



唐山の山抜けは土石流となって下流の河川、流域の農地や住宅、道路を破壊した





唐山「ナギの沢」大規模の山崩れが起こった。巨大な岩が押し流されてきた。お堂は「お神馬神社」地域の皆さんは毎年八十八夜に豊穰を祈った



「ナギの沢は岩肌に見える比較的崩れやすい地質である」と伝えられていた。■
■■■■氏宅(■■■■)の土蔵、納屋が全滅した

李平地籍は大洞、唐山、馬羅、大日向の玄関口であり沢の集まる場所に橋があって、木炭倉庫が全壊流失してしまった



唐山ナギの沢の山崩れと唐山川の濁流で木炭倉庫、■■■■氏宅(■■■■)、■■■■氏宅(■■■■)の土蔵、納屋等が流失、裏口から入った濁流で土砂に埋まった母屋



変わり果てた李平

■■■■氏宅(■■■■)の流失した家の残骸で上方から撮影した。落合から李平までの有線放送の電柱がすべて流れてしまった



夜になると唐山沢の山が崩れる音で、異様な「ゴウゴウ」と雷の落ちるごときにたえ様のない騒音が一晩中続いた。翌朝避難場所を下りて変わり果てた姿に嘩然と立ちすくんでしまった。母屋の一部が残った■■■■さん宅(■■■■)



■■■■ 猿沢川が鉄砲水となり決壊して■■■■宅の母屋、土蔵、納屋など全壊した



自衛隊の災害救助は、6月30日からで、高田駐屯部隊が当たった。応急現場に向かって懸命に作業に携わった自衛隊員は一日の作業を終えて宿泊場所へ帰る李平付近



災害復旧



猿沢口より下方の整備された護岸。
遠方は中央アルプス(昭和39年撮影)

第二節 上割落合、南海は壊滅的打撃を被った

上割北洞方面や大曾倉川の濁流が落合集落を襲って、菓子屋、鍛冶屋、建具屋、製材所、大工、運送屋、宿屋、綿打屋、助産婦等の山間地域の経済を担っていた集落が一瞬にしてなくなってしまった。農協の稚蚕所はお蚕の上簇で指導巡回をする二人の先生が宿泊していた。災害時稚蚕所の周りが濁流で取り囲まれて孤立状態になり瀕死の体験をすることとなった。安全と思って稚蚕所の庭に止めてあったバスが流失してしまった。大正時代に建設された中沢村営発電所も再起不能に破壊されてしまった。

落合、南海地籍 昭和58年氏子中により不動明王之由来の碑が建立されて、山女魚の言い伝えが刻まれている。落合、南海地籍の当時の華やかさは無くなったものの、ひっそりとした山間のたたずまいを覗かせている



大曾倉行きバスは、「落合橋より上に行くことは無理だよ」と消防団員に忠告されて、稚蚕所の庭に駐車した。己む無く運転手、車掌は自宅へ徒歩で帰った。翌朝バスが濁流に横転している状況に唾然とした



上割落合地籍は、新宮川、大曾倉川の合流点で、北洞地籍の鉄砲水や土石流によって被害を受けることとなった



農協稚蚕所と十王堂 北洞側の濁流と大曾倉川が合流して、その勢力を増し、田畑、発電所取水口、落合橋、道路を流失した。落合集落の22世帯の内14世帯と中山1世帯、稚蚕所、製材所を一夜のうちに跡形もなく姿を失った



落合の■■■■氏(■■■■) 左側の道路は濁流で洗いながされ、右側は新宮川からの濁流で住宅の半分余りが埋まった。近所の親戚宅に1週間ほど間がりの生活をした

南海の前方の家は■■■■氏宅(■■■)後
方の家は■■■■氏宅(■■)有線の電柱が
あちらこちらで倒壊した



大正時代に村営発電所として新宮川発電
所を建設し村内全戸に電気を送った。こ
の事業は大成功で村の発展に貢献した。
災害で流失して廃止となった



有線放送の幹線で上割落合、大洞、中山、
大曾倉が流失のため音信不通となった。自
衛隊員の応援を頂いたが資材不足で苦労
した





上割南海入口の応急架橋の自衛隊員、真夏の汗だくの復旧作業だった(7月14日)

南海橋の仮設橋の建設に当たる自衛隊員



災害復旧

復旧後の落合地籍 立派な護岸が完成して災害の心配がなくなった(昭和39年撮影)

中部電力95周年記念「でんきのふるさとを訪ねて」シリーズ

村営電気 新宮川水力発電所跡地(村岸のところが)

中沢村(現在の駒ヶ根市中沢)は大正8年村営電気事業として、出力95キロワットの新宮川発電所を作り、村内全戸に電気をあかりました。以来、同村は「ちようちんのいしめ晴るし村」とも言われたほどで、事業は大成功、村の発展に貢献しましたが、36の災害で発電所などが流失し、廃止されました。今は対岸の山中に水圧鉄管や導水路を残しており、導水路は少も上水用途として使われています。

【新宮川発電所の歴史】 大正 2年(1927) 村営電気村営事業と併設、中沢村営1号発電所
 7年 発電所建設と土木工事の認可、7月工事完了
 8年(1933) 5月、出力95kWの中沢水力発電所、事業大成功
 11年 電力消費が50%増え村営電気事業が北から次第に、村内に広がった
 13年 発電972万kWh、2407世帯(1戸平均25世帯) 集電率432%増 51.3電力
 14年 発電増益が120%増えた
 昭和15年 中沢発電に被害、村営事業は廃止
 71年 村営電力に継承
 10年 水力発電事業で環境保全と発電の役割を担う

中部電力 飯田支社・駒ヶ根市教育委員会

新宮川発電所跡地には、村営電気事業の草分けとして、「電気事業は大成功、村の発展に貢献した」と記されている

第三節 百々目木川流域は甚大な被害を被った

上割の南洞は新宮川の支流大松尾から流れる百々目木川の一帯である。集中豪雨による無数の山崩れ、山津波と百々目木川の増水、氾濫で流域の住宅等、田畑、道路の寸断、橋梁の流失など一夜にして甚大な被害を受けることとなった。大松尾から桃ヶ平、大角、引ノ田、新沢が特に激しく新沢から合流した濁流は南分校近辺の住宅、道路、橋梁を一挙に押し流して、勢いを増して百々目木川の川向2軒も流失し、広大な河原にして矢台地籍へと向かっていった。この災害で道路の崩落、橋梁の流失など交通機関は全く途絶えてしまって、自衛隊員の復旧工事により南洞方面まで行けるようになったのは7月に入ってからである。

中沢小学校南分校は災害以降移住に伴う過疎化により、児童数の減少によって、39年3月廃校を決定した。



百々目木川 板橋付近(南分校跡地)の災害前は学童が行き来してにぎやかだった。昭和57年南分校同窓会有志によって、南分校之跡碑を建立した

南分校前の仮橋を復旧工事する自衛隊長



百々目木川の被災地は一面河原となってしまったが、道路、農地が整備されて平穩無事を偲ばせている



桃ヶ平の■■■■氏宅(●)上流は広い河原と化した



桃ヶ平百々目木川の四徳方面へ架かる橋は36年3月竣工。この橋に流木が詰まって川の流れが変わり下流の耕作地に大きな被害が出た(丸太橋を渡る中沢局の集配人)

■■■■氏宅(■)は土蔵だけが残った。停電、有線機能が途絶えて郵送された新聞だけが情報源だった。新聞の記事で災害の痛ましさを知った



降り続く大雨は物凄い濁流と石の転がる地響き、南洞の一番奥の■■■■氏宅(■)は、土蔵のみ残して本宅は流失した

桃ヶ平の河原に土蔵だけが残った■■■■氏宅(■)、本宅は流失





大松尾の一番奥の家に行くのには、道路が崩壊して被災地の徒歩での郵便配達は苦勞があった



早草から臨む引ノ田、桃ヶ平地籍の氾濫した百々目木川



大角地籍



引ノ田地籍には5世帯あったが
大方全壊、田畑は殆ど流失した



細ヶ谷の山津波で土蔵を失い、
本宅も土砂で埋まった [REDACTED]
氏宅 [REDACTED]



荷物をまとめて一まず安全地帯へ
移動する被災者 [REDACTED]



自衛隊のヘリコプターが上空から撮影した早草口付近



大松尾の山腹崩壊と百々目木川が河原となった桃ヶ平地
籍、茅葺きは早草口のお堂

新沢には6世帯あったが三六災害で全戸移住した。





高い溪谷となった新沢川



新沢 大きな岩が散乱した



新沢は土石流によって、沢という沢は全部押し流されて平和な山里も一瞬にして変わり果てた。



南分校前の百々目木川は40mの川幅となって、校舎も流される危険にあった。

氾濫した百々目木川、広大な河原となってしまった。





四徳へ通じる県道も流失して庭まで削りとられた[redacted]氏宅（[redacted]）



百々目木地籍において水路復旧の難工事に活躍する自衛隊員



大角地籍の四徳方面へ架けられた橋付近の堤防が完成した



災害復旧

百々目木川支流の大角洞の水路も整備された(昭和39年撮影)

災害復旧



引ノ田井は削り取られたために高架構造となった(昭和39年撮影)

災害復旧

災害によって広大な河原となった百々目木地籍は農地が整備された(昭和39年撮影)



第四節 四徳の惨状

中川村四徳は折草峠越えの婚姻関係も多く中沢との関わりが深かった。昭和34年11月より赤穂から中沢経由四徳行きバス運行をするなど四徳の皆さんは、中沢、赤穂との距離が近くなって、生活環境が変化した時期でもあった。

三六災害の魔物のような大洪水によって、川沿いの家屋の流失がいたるところで発生した。橋梁は殆ど流失し、道路はずたずたに寸断され、四徳全体が孤立状態に陥ってしまった。鉄砲水の渦に流れる家屋や家財、家畜など意のままに任せしか手の施しようがなかった。不幸にして死者7名、重傷者2名、家屋の流失48戸、全壊4戸、半壊9戸、四徳分教場半壊流失、農協支所流失、診療所流失、四徳鉱泉半壊、福泉寺流失等生活の拠点がすべて失うほどの被害を被った。全部落84世帯は歴史に思いを預しつつ集団移住を決定して無住の四徳となってしまった。(四徳誌参照)



中川村四徳中心部の被災の状況
中央が四徳分教場



伊那自動車株式会社は、
3両のバスを流失した
その一台
(昭和36年6月27日)

第五節 中割矢台線から桜渡地区、大津渡橋付近

百々目木川の流域各地は上割南洞の荒れ狂った惨状によって、いたるところで河川の氾濫、道路、田畑をはじめ、橋梁の流失、家屋の流失等の大災害となった。上割地区の基幹道路(県道西伊那線)でもある矢台橋は1号橋、2号橋、3号橋まで全部が流されてしまった。桜渡地区の[]宅([]), []宅([])は全壊してしまい、桜渡橋は消防団員の懸命の努力によって流失を免れた。上割から中曾倉に架かる道平橋は左岸の崩落によって半壊の状態となった。新宮川は百々目木川と合流して、その下流はいっそうひどい惨状を見せつけることとなった。中曾倉から中割香花社方面に通じる大津渡橋も流失して農地も荒れ放題に河原となった。



昔ながらの面影を留めている大坪地籍



崖崩れで道路が無くなった。
矢台橋の1号橋から3号橋
まですべて流失した



氏宅
にぶつかった流木は薪にして二年分もあったとか



百々目木川の氾濫で桜渡橋は危険な状態になった。しかし、消防団員や地域の人達の懸命の努力によって流失を免れた



三村道路(中沢村 伊那村 宮田村)から上割に架けられた道平橋は左岸の決壊によって半分に折れてしまった



中曾倉から中割に架かる大津渡橋、水田が流失し一面河原となった。新大津渡橋は昭和38年に完成した

災害復旧

整然と整備された堤防と完成した道平橋
(昭和39年撮影)



第六節 本曾倉、下割地籍の住宅、水田、橋梁流失

新宮川下流域は、すでに26日警戒水域を大きく突破していた。御社宮司橋の上流右岸の■■■■氏宅(■■■)の二階建て家屋は、土台が削り取られて傾いたと同時に濁流にのみこまれてしまった。

降り続く雨は一向に止まず、6月27日昼ごろから一挙に激しく降雨があつて、下曾倉橋の地元の人たちは橋畔の土を取り除き何時でも流れやすいようにして、兩岸の被害を最小限に食い止めようといざという時の備えをしていた。午後6時ごろ■■■■氏宅(■■■)の本宅、土蔵、■■■■氏宅(■■■)の住宅は、一挙に土台石がさらわれるや建物も「バリバリ」と一瞬にして流失してしまった。■■■■氏宅(■■■)は浸水、木造の下曾倉橋も勿論のこと流失してしまった。

新宮川下曾倉付近 たびたびの水害に下曾倉橋は流失して、三六災害の復旧工事によって、堤防の高上げをした。■■■■氏宅(■■■)の住まいも埋め立てをして建て替えた



本曾倉の■■■■氏宅(■■■)は流失を免れた。下割の■■■■氏宅(■■■)、■■■■氏宅(■■■)はなくなってしまった



岸壁に架けられた御社宮司橋は安泰だった。僅か上流の■■■■氏宅(■■■■)は流れてしまった



6月27日荒れ狂う土石流は瞬く間に下曾倉橋を飲み込んだ



下曾倉橋は昭和13年、25年の水害にも流失、三六災害にも堤防の決壊によってなくなった



坂本と大上2軒の流失と■■■■氏宅(■■■■)手前の青田が全部失って軒先まで河原と化した

災害復旧

下曾倉橋と下割地籍の護岸堤防がかなり高くなった。橋の完成 昭和37年9月 総工費444万円(昭和39年撮影)



第七節 被災によって新宮川岸の様相は一変した

6月27日午後8時ごろから新宮川岸、大丸屋付近一帯の堤防を乗り越えた濁流の流入が始まった。暗闇の中を恐ろしい音を立てて、流木、橋材、流失家屋の柱などが流れてくるようになってきた。堤防決壊を最小限に食い止めようとして、ブルドーザーで新宮川橋の破壊作業を試みたが思うようにはいかなかった。そうこうしているうちに左岸の堤防が崩れて橋は流れてしまった。一夜にして新宮川岸一帯は土砂2m近くも堆積した。

被災以前は写真屋、下駄屋、板金業、理容店、マッサージ、自転車屋、蹄鉄二軒、大工、豆腐店、竹細工店、雑貨店、鉄工業、鋸屋、タバコ店、旅館、菓子屋など商工業団地が整っていた。災害と経済成長の流れに伴う環境変化によって、廃業や、地区外へ移住するなど新宮川岸の様相は一変することとなった。



中沢大通りとして整備された新宮川岸付近 被災によって商工業団地の様相が変わったものの道路の整備によって、再び活気を取り戻しているようだ



新宮川岸一帯が広大な河原となった。上空から撮影



懐かしの新宮川岸橋 6月26日
午後5時撮影 かなり水嵩が増
えているものの木造の橋は健在



6月27日 下割側より撮影の新宮
川岸橋 かなりの増水で地域の皆
さんは危険な状況を視察している



6月27日午後 氏宅 ()
() 前から埋没の状況を視察してい
る天竜橋を渡って下平の皆さん



カッパ姿の地元の皆さんはあき
れた惨状に手のつけようがな
かった。下割 氏宅 ()
() 付近より新宮川岸を望む



松木平橋の原側より撮影 左岸は■■■■氏宅その左側は冠水した下割の水田、右岸は■■■■氏宅(■■■■)土蔵の元まで土砂が入り込んだ。遠方の白く見える直線は増水の天竜川



6月28日市道左側は濁流の新宮川その右側は埋没した新宮川岸集落 一面が新宮川と天竜川の湖となった

県道の両側にあった新宮川岸集落はすべて土砂で埋没、左側は春日自転車店、新車のバイクは埋没した。遠方の山は戸倉山



新宮川岸の右岸堤防決壊で牛枠を組んで最小限に食い止めた。新宮川氾濫で河原となった。新宮川橋のあたり



消防団員は災害各地で活躍した。管沼堤防で牛枠を組んで決壊を食い止めた

竜東土地改良区は河原の基盤整備をしたばかりに圃場が一面埋没してしまった





吉瀬除けは道路改良前の徒歩並びに自転車しか通行することができなかった。崩落して危険な個所となった(有線放送の電柱)



下割 [redacted] 氏宅 ([redacted]) 精米所前の崩落個所の改修作業をする自衛隊員



新宮川岸には2mの土砂が堆積した。自衛隊員の皆さんと地元の皆さんはベルトコンベヤーを使って土砂を片付けた(本多写真館前)



自衛隊員による 102建設大隊施行の仮設新宮川橋が完成した。
渡初式の準備をする自衛隊員



仮設の新宮川橋の開通式をする自衛隊員



仮設の新宮川橋が完成したもののバスの通行は出来なかった。暫く赤穂と新宮川岸間の往復、中割とか大曾倉方面の運行は東伊那経由だった



松木平橋付近の堤防建設工事
重機と言えばブルドーザーが活躍した

災害復旧



三六災害後に架け替えされた松木平橋と嵩上げされた堤防

災害復旧

新宮川橋は木造の橋だったが、永久橋に架け替えた
(昭和39年撮影)



災害復旧



災害では土砂が堆積 水路も整備された舟渡島の水田(昭和39年撮影)

第八節 駒ヶ根市長の陣頭指揮と有線放送の活躍

復旧課程

6月26日から梅雨前線の発生によって、伊那谷各地に激しく降る雨は、新宮川から南方にわたって大雨が降り百々目木川、新宮川の支流から流れる土石流が下流の河川を痛めつけた。有線放送はその状況から消防団員の出動要請を頻繁に放送した。駒ヶ根市長は県等の視察団に惨状を請願、災害救助法が発動された。建設大臣他視察団が来駒して惨状を訴えた。

三六災害に見舞われて慌ただしい変化の体験をすることとなった。百々目木川を村上建設、新宮川を鹿島建設等大手建設業者が復旧工事に当たった。地元の建設業者も工事に関わって地域の皆さんも総出で応援した。この時期は経済成長の入り始めのころであり工場の進出によって、労働力を必要としていたために被災後の回復に随分助けられた。

県内外からの支援物資をたくさんいただいて被災該当者に配布した。



中村建設大臣一行が視察に見えた。新宮川岸現場で説明する北原名田造市長は惨状を説明



災害の状況と支援を訴える有線放送、頻繁に通話交換の取り次ぎをした。交換台に向かう職員。中沢農協



災害移住者の為の市営住宅と応急仮設住宅、中沢の被災者や中川村四徳の皆さんが入居した。赤穂原垣外



駒ヶ根市三六災害復旧工事の合同起工式を行った。県、市の関係者、建設業者など180名が集まった。新宮川岸地籍



中沢農協の2階で県内外から贈られた救援物資の整理をする日赤奉仕団(婦人会)の皆さん



百々目木川で大手建設会社が復旧工事に当たった。村上建設



地元のお年寄りや奥さん方も
建設作業に総出で応援した



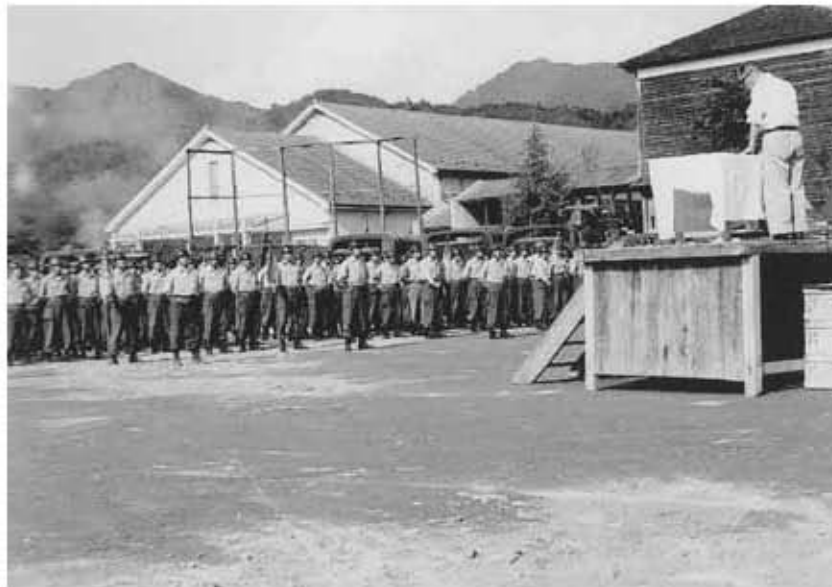
災害の流木は風呂、炊事等の焚
き物として暫く困らなかった



当市に31億円に上る被害をもたらしたが
国、県関係機関と市民の一致した協力に
よって復興することができた。新宮川岸
に建立された北原名田造市長揮毫の「災
害復興記念碑」大惨事の復興事業が終了
した。昭和39年7月13日除幕式を行った

第九節 救援に駆け付けた自衛隊

災害地救援のため30日高田駐屯部隊(新潟県)の340名、7月1日には、朝霞駐屯部隊(埼玉県)60名が入って、百々目木、大洞、落合、新宮川岸等の道路復旧や仮設橋建設にあたった。真夏の暑い時期にもかかわらず、自衛隊員は懸命に作業に携わっていただいた。応急工事が完了して地元の皆さんは、中沢中学校、東伊那小学校校庭に集まって、北原市長や中学生他お礼の挨拶と万歳をして感謝の気持ちを表した。



陸上自衛隊高田駐屯部隊から支援に駆け付けた自衛隊員に状況説明と復旧作業等のあいさつをする北原名田造市長。中沢中学校校庭



中沢中学校校庭は陸上自衛隊の臨時駐屯地となってジープ、ヘリコプター等暫く騒然とした。自衛隊員間の情報交換はすべてヘリコプターで行った

駒ヶ根市役所中沢支所前が臨時の自衛隊員接待所となった。宮崎総監が最後の来駒、一安堵の情報交換、接待するのは竹村定義元市議会議員



陸上自衛隊上官が機上に向かう最敬礼、被災地を上空から視察、四徳方面へも向かった。中沢中学校校庭



離陸寸前の陸上自衛隊ヘリコプター



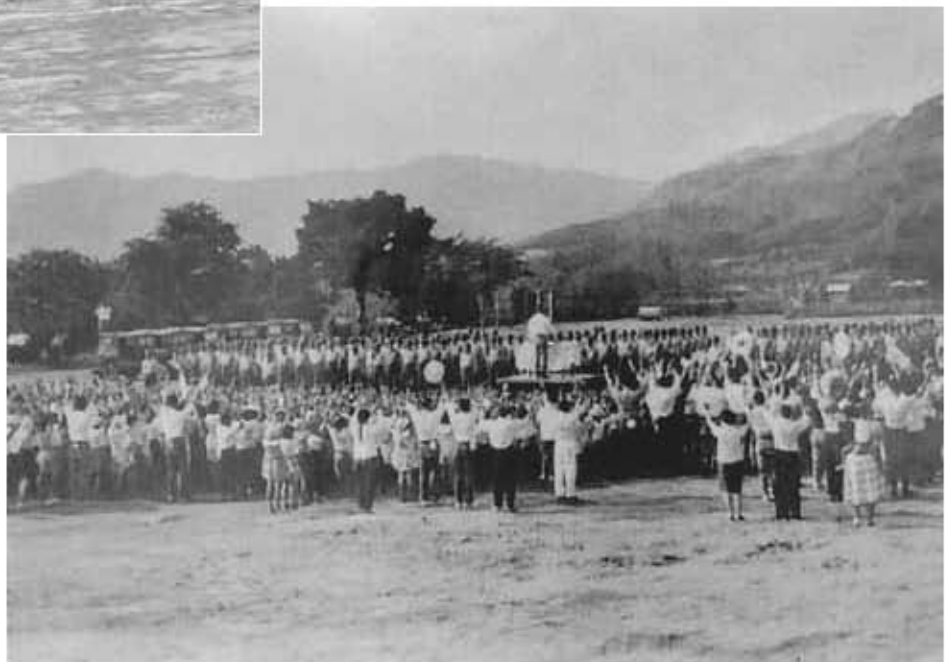
新宮川岸福寿屋前で自衛隊員による復旧活動
大型ブルドーザー

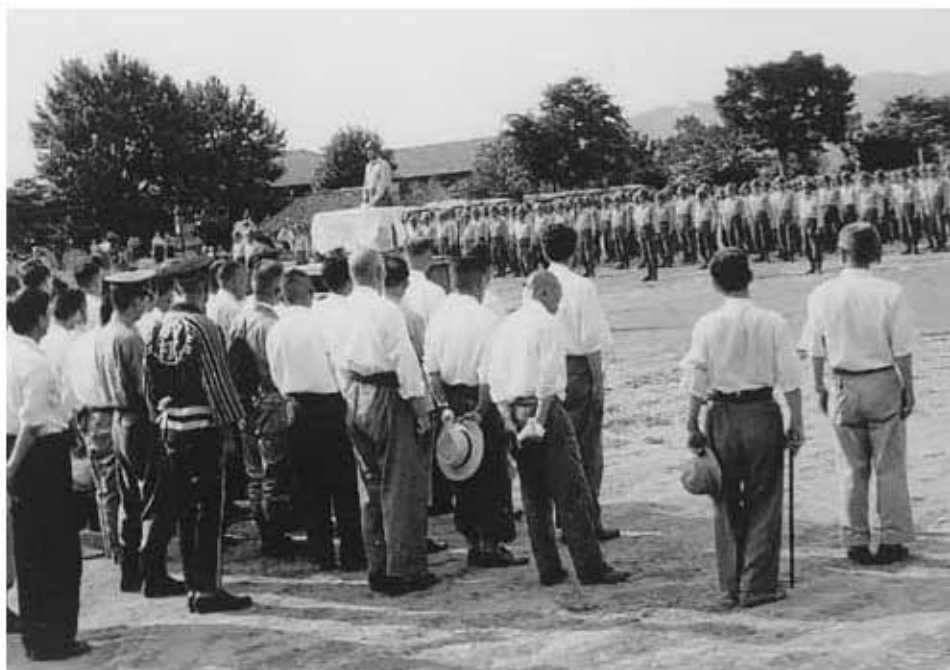
北原名田造市長 菅沼徳門元市
議会議長他は陸上自衛隊員の接
待と上空からの視察に加わった



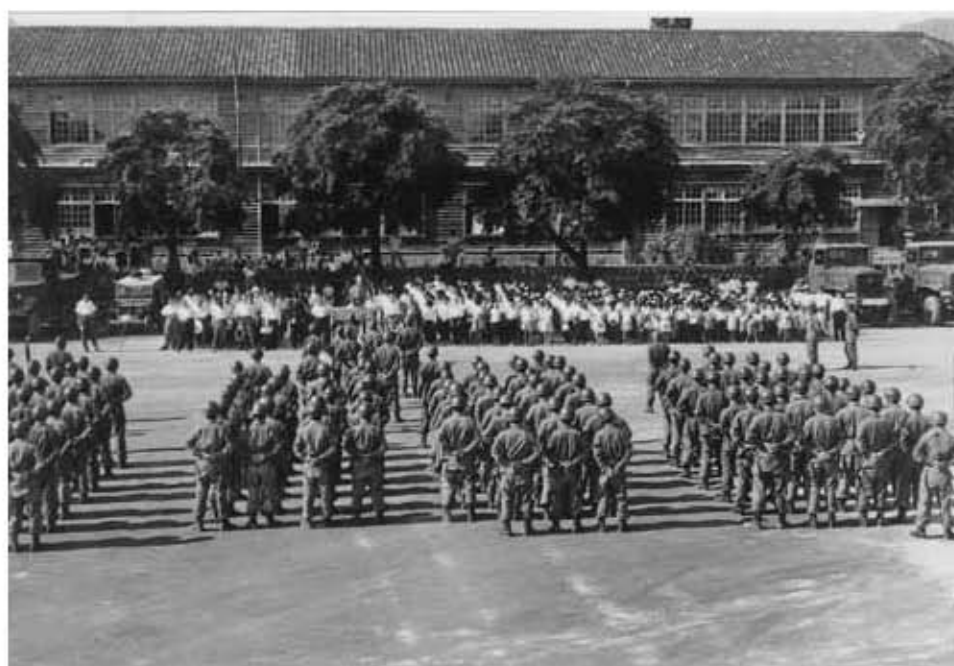
送別式における地元の
皆さんは大勢集まって
感謝の集いを行った

復旧作業の任務を終えた自
衛隊員に、地元の皆さんは
万歳をしてお礼をした「大
変お世話になりました」





中沢中学校校庭において、
告別の辞の陸上自衛隊長



東伊那小学校校庭におい
ても感謝の集いを行った



任務を終えて帰隊する自衛隊員
を見送る市民たち「自衛隊員の
皆様ありがとうございました」

第一節 三六災害時の気象状況

この年は陽気もよく農作物の生育も良好で、雨は少なく水不足の心配をされてきました。

6月下旬に入ると北太平洋の高気圧が次第に強まりました。

24日 夕方より梅雨前線本州南岸に北上し時々雨が降り出しました。

25日 前線が北上を続け、熱帯低気圧の影響を受け西日本が集中豪雨になり、局地的被害が出はじめました。

駒ヶ根地域は24日より雨が降り始め、25日には総雨量が30mm近くになりました。

26日 熱帯低気圧が台風6号となり梅雨前線が刺激され、総雨量が40mmとなり、17時45分に大雨注意報が発令されました。

27日 駒ヶ根地区は梅雨前線の直下におかれ、朝から大雨となり各河川の増水が益々激しくなりました。

午前10時ごろにはバケツを開けだしたような雨になり、各学校は早帰りになりました。

7時ごろ時間雨量10mm・11時ごろ時間雨量36mm・

13時ごろ時間雨量40mm

飯田線上下は不通、中沢バス路線は下平でストップされ東伊那周りになりました。午後あたりより中沢地区でも災害がはじまり、益々雨は激しくなり17時20分大雨洪水警報が出されました。

18時総雨量250mm・19時総雨量340mm・24時総雨量340mm

28日 午前2時総雨量400mm（時間当たり30mm）の雨が降り、飯田測候所開設以来最大降水量になりました。

新宮川・百々目木川流域は大惨事になり、新宮川が氾濫し新宮川岸28戸が浸水埋没しました。

●36年梅雨前線時の雨量

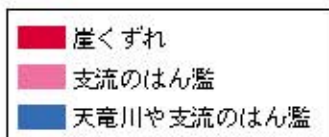
駒ヶ根市誌による(観測所赤穂)

月日	降雨量 (mm)
6.23	5.3
24	36.0
25	13.2
26	69.4
27	155.5
28	39.5
29	33.8
30	18.9
連続雨量	371.6

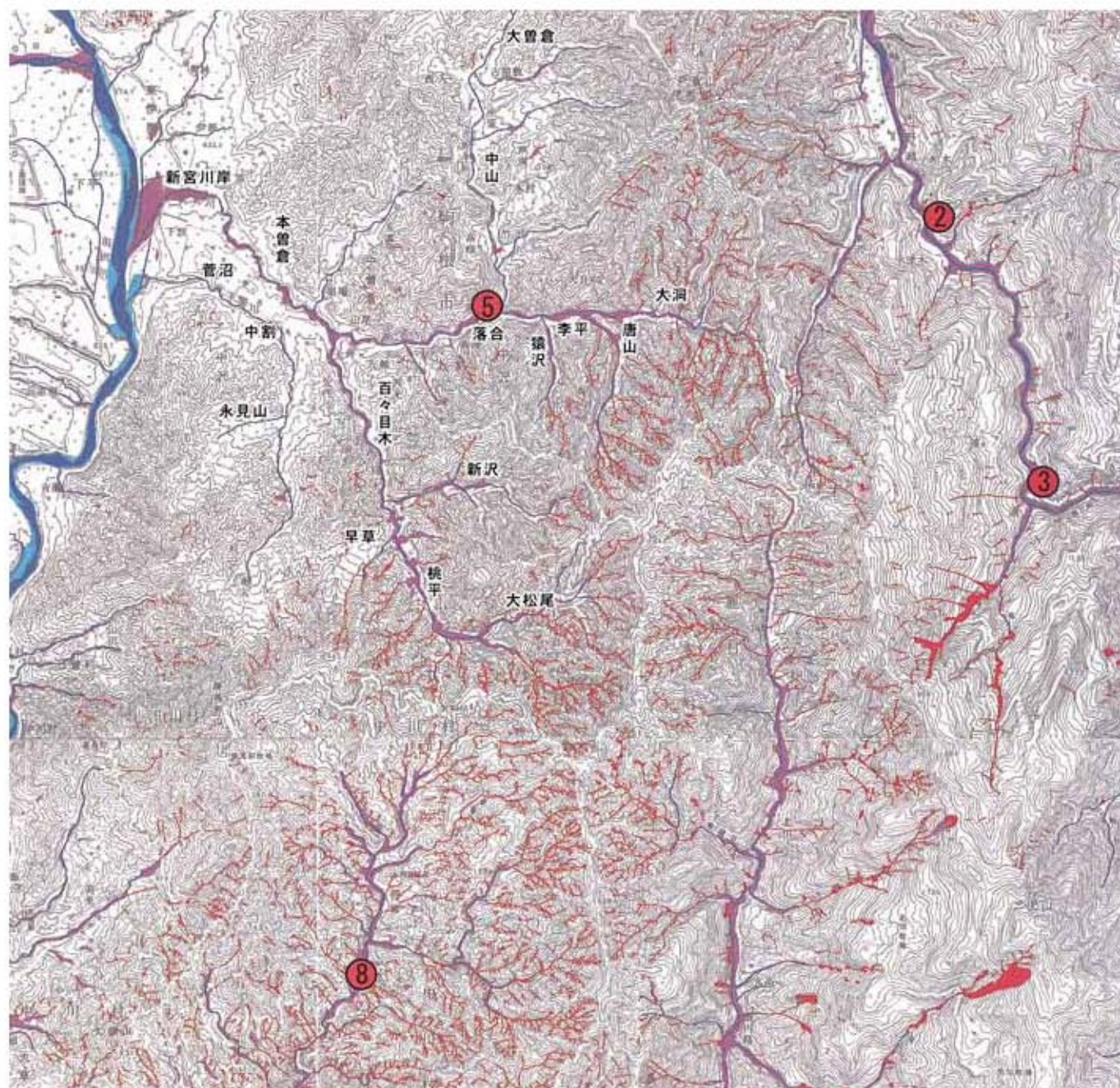
●他の観測所の連続降雨量

観測所	降雨量 (mm)
伊那里	441.7
諏訪	367.7
大鹿	482.0
飯田	563.7
平岡	459.7
恵那山	862.0
市田	571.3

昭和36年6月25日から降り始めた雨は、27日午前9時ごろより大雨になり、27日午後より28日にかけて豪雨となり、特に上割地籍落合より上流の新宮川流域・百々目木より上流の百々目木川流域は過去にはない豪雨で崖くずれ、土石流が発生した。



国土交通省 天竜川上流河川事務所
二六災害洪水はん監・土砂災害の記録より



第二節 災害を語る

災害から3年後の対談（中沢有線放送本部の録音テープより）

出席者	当時の上割区長	戸沢主計
	当時の中央支所長	竹村長彦
	当時の駒ヶ根市議会議員	菅沼徳門
司会	中沢有線放送本部	矢沢古里

矢沢古里 最近、地震による大災害が新潟から東北地方に勃発、毎日その惨状が報ぜられています。

災害は忘れたところに襲来する。と申しますが、中沢を襲った集中豪雨の災害も、もう満三箇年前となりました。今日は当時の被災者であり一番災害の酷かった上割の今年の区長になられた戸澤さん、当時の支所長で災害救助に寝食を忘れてお骨折り下さった竹村さん、災害対策委員の中心として周到な配慮とご活躍をいただいた菅沼議長さんのご出席をいただいて当時を回想しその後の経過や将来への対策、希望などをお話しますのでよろしくお願い致します。

まず、あの時の恐ろしかった桃ヶ平方面の状況を戸澤さんお願いします。

戸澤主計 7月25日から降り始めた雨は25、26日、さらに27日と日を追うにしたがってその度を増して27日の昼頃にはバケツであけだすほど降りだし午後3時頃になると子供もポツポツ帰ってきて川の水は物凄く噴いてきました。

3時を少し回った頃には私の家のすぐ上の■■■■さんの家が流されてしまい、その流れで橋は上流より段々と落とされてしまいました。

昭和13年の水害で残った私の家の前の大きな胡桃の木が立ったまま川を伝って流れていき、これは凄いという事で水に注意をしていましたところ、夕方になるに従って雨量も増し、川岸をどんどん変えてくるので今日はおちおち寝ていられないと言う事で避難の準備をしました。有線は4時頃に切れてしまい電灯もつかない暗闇の中で荷作りをして足固めをして待っていま

した。私は便所の角へ出て、真っ暗で先が見えないので竹竿を前へ突き出してここまで欠けてきたら退避命令を出すからそれまでは家の中にじっとしていなさいと言う事で有り合わせのランプを引き出して明かりを頼りに、すくんでいた状態であります。一晚中降り続いた雨は明け方になって先が本当に見えない真っ暗な状態、家のすぐ前の■■■■さんの家の屋根をすかしてみると微かにみえたのですが、その家が流れ出す音が川の音で消されてピシピシ、バシバシと、いつ流されたのかわからない位に流れてしまい、朝になって聞いたら4時頃に流されたというのですが、流れる時を私は気が付かなかったという状態で28日の朝を迎えたわけです。28日、終日降り続いた雨は、なお下流の物をどんどん押し流して何軒もの家を流失させました。また、山の手の家は家の裏から押し出された土砂で押し潰されると、このような状況になると人間は食べるものが喉を越さなくなりボサツとしてしまう、勿論家畜類も餌を食べない状態になってボケてしまうというような日が続いたわけです。

矢沢古里 大変な事でしたが、あの時支所で下割から新宮川方面からの刻々としてくる状況をキャッチしておられたのは支所長さんでしたがあの時の状況はどうでしたでしょうか。

竹村長彦 思い出せば3年前の6月27日の昼頃から続いておりました雨が、一挙に激しく降り出して各河川は刻々と大增水となり、赤穂方面から粟沢線を帰ってくる高校生等が清水川の氾濫で消防団員の肩に頼ったりして帰らなけれ

ばならないという状況になり、一般の者は東伊那に迂回して帰宅するという状態で新宮川岸がストップしてしまったのでございました。午後4時頃から下割の坂本、大上、本曾倉の奈良屋の家屋が危険であるという事が有線で報道されてきて新宮川橋付近の状況も非常に悪化してきたので至急防水応援をしてもらいたいと有線から刻々と伝えられてきました。

夕刻に近づいて松木平付近の入口、下浜の家屋も非常に危なくなってきたという状況でありました。其のうち有線から百々目木付近の防水に消防団の応援を求めるという要望も入ってくるのですが尽くす術が無く、警鐘に有線にと消防団員、その他一般の防水作業を求めてくる箇所が益々拡大されていったのでございました。

防水に全力を尽くしたるも荒れ狂う濁流を人力によってはどうしても防ぐ術が無く、ついに夕刻、六時頃に奈良屋の家屋に土砂が流入し同じ時刻に下割の坂本、大上の家屋が流出されてしまいました。この頃から濁流は益々増加して新宮川橋を破壊し、いよいよ新川岸部落を守る方法は無いということで新宮川橋の破壊作業を開始したのですが橋は容易に破壊ができず、ついに夜半に至って堤防が決壊となり新川岸部落は土砂の中に埋もれてしまったのでございました。

遠隔地との有線が全く不通になり災害の状態を知る事が全く不能で電灯は消え闇の中に濁流と石の音のみ聞こえる夜の不気味さはちょっと言葉では言い表せない状況でございました。

なにしろ百々目木川にある橋という橋14、15はみんな流れてしまったのです。道は壊れる電線は切れる有線が不通になってしまう。北洞は大坪から上は皆目、様子がわからない状態でした。28日の午後1時に急遽、市役所に災害対策委員会が開かれましたが新川岸の家が24戸砂に埋められ、消防団が水防を懸命にやっていることはわかりますが上割の奥の方の状況がちっともわからないのですが、菅沼さんあれから対策委員会が中沢へ来た状況をお願いします。

菅沼徳門 てんでに右往左往している状況で、取り留めてどのように注意をしたらいいのかも

さっぱり計画がたたない、市役所とも、もちろん連絡もつかない。結局、対策本部をこっち(中沢)につくってそこで統一した救済をしないと手の尽くしようが無い。実は市役所では対策委員会をつくって対策本部を市役所にと生ぬるいことを言っていたのですが、そんな事をしていたのでは現地のすぐ手は止められないということで支所長と相談をして急遽市役所へ行ってポヤポヤしていないで中沢へ対策本部をもってきて欲しいという事で急遽つくったのです。そして対策委員には各区長とそれから消防、農協、市役所とそれぞれの赴きの者をみんなまとめて本部を支所に置き、これから救済をしていくという事になったのが28日の午後です。

そこで本部を設けると同時にすぐ災害救助法の適用を受けたいという事になったのですが災害救助法はご承知のとおり50戸以上の被災がないとその対象にはなりません。

いま竹村さんからお話がありましたように上割の上の方は連絡が一向に取れないので奥がどのようになっているのかさっぱりわからなかったのですが、おいおい本部からの連絡がついてようやく上のほうの様子もわかってまいりましたが、それだけでは一戸一戸まともならない。ところがごらんの様に新川岸が28戸もの家がほとんど砂に埋まってしまったので、家こそは建っているけれど流れたのも同様だと言う事でまとめると50戸の余になって60戸程になりました。

それで災害救助法の適用を受ける申請を急遽本部から県に向かって要請をし、それと同時に自衛隊の発動も県に要請をしたのです。そのような事で災害救助の手をつけたのが29日の午前であります。

そこで県知事に要請をしました、自衛隊の市長からの要請が直に受け入れられ30日には新潟の高田部隊の大塚隊連隊の先遣隊が到着をしたわけでございます。その時の自衛隊の様子を支所長さん、お話をさせていただけますか。

竹村長彦 只今、菅沼さんから対策本部を設けられた件についてお話がございましたが、私の立場では実は27日に災害でさらわれて28日の

朝になったわけでございます。

有線は途絶え遠隔地の被災の状況がわからないということで一応、中沢支所に中沢地区の対策委員会を設けなければならないということで正午に各区長さん、団体長の方々にお集まりを願って検討をしたわけです。その結果一応消防団員の方、支所の職員、農協の職員等々をお願いし、青年会の方もお願いをして被災地に向けて被災の状況を調査にかかっていたいただいてその結果を集めたところ、死亡が5名、負傷が2名、流出・倒壊が64戸と大体大まかにわかったのです。

その結果まず人命救助が優先される事に結果をもち、とにかく途絶えたところへ薬品、食料、灯火に使う蠟燭等々をまず送り込まなければならないということでしたので、これは健脚の消防団員の方、支所の職員の方をお願いして急遽分散して上がっていただいたのでございます。

そうした形が28、29日と続きまして、対策本部が設けられて自衛隊の方々が30日に入ってきて下さったということでした。

新潟の自衛隊で高田部隊、細川部隊の方々が入ってきてくださって早速、人が歩ける道路を第一につくっていただくこと、有線を繋いでいただくこと、電灯を早く付けていただくこと、水道がきれている所を早急に直していただくこと、こうしたことが重要な第一の眼目でこれを早くやっていただきたいということをお願いをして着々と成果を進めていただいたわけであります。

自衛隊に来て頂いて本当ホッとして泣いてしまいました。

自衛隊の方々のサービス等々は婦人奉仕団の方々に毎日出動していただいて奉仕団の方々にも非常にご苦勞をかけたわけでもございました。後は本部の方々が奉仕団、自衛隊の方々と共に復旧に専念をしていただいたというわけでございます。

7月9日に新潟の大塚隊がお帰りになるということで中学の校庭にて送別式を行いました。市長より感謝を申し上げ大塚隊長より謝辞がありました。

10日に市民は沿道に多数堵列して涙の感謝をもってお見送りを申し上げたのでございました。

それから9日に高田部隊がお帰りになり、10日に作業隊の東京都の朝霞作業隊が260人でしたか工兵隊が来て、専門的には橋、道路の復旧を大型の機械を用いて作業をして頂いたところめざましくどんどん道路が出来てきたので、災害については自衛隊の本当の真価というものをひしひしと知り今でも感謝を増しているであります。

南海の橋が2つでき、新宮川を渡って伊那村でもやはり朝霞隊の感謝、送別会を行っていました。わざわざ東京から機械をもってきてやってくれたのですから、とても自衛隊でなければあんなことはできない事です。

今度の災害を通して初めて認識されたのは、やはり大きい線でなければならないと、この災害を通して市になってよかったのだとつくづく痛感したわけです。市の力によってあの自衛隊も引っ張ってることができたのだと本当に痛感したのです。

矢沢古里 一ヶ月にわたる応急対策が大体完了しましたが上割の150余戸が集団移住を実施されまして60戸も減ってしまったという状況ですが、戸澤さん。

戸澤主計 上割では移住の話が持ち上がりまして、本人の希望によって移住をするということなので上割部落から62戸が他地区へ移住していき、この人達は最初居着かぬようでありましたけど、段々と仕事にも慣れ、また自分で仕事を始める人、工場へ勤める人というように別れ別れになったのですけれども、今では板につき希望に燃えて働いておられるようです。残りしました85戸の部落上割は行政面でも多少の支障は止むを得ない事ではありますけれども範囲は全然減らず戸数だけ減ったのでは末端の組織としては誠にまずい結果なのでなんとかしよう、なんとかしなければ区はやっていけないということで昨年来研究を重ね、やはり8つに分かれていたものを地域的にまとめあって4、5常会にするかと、これはなかなか難しいことですが手っ

取り早いところ伍長組の統合と段々話し合いの結果2ヶ所一緒になっているのですが将来上割部落としては、4常会位が適当な行政区画の末端の組織ではないかと考えて努力をしているのですが難しい問題ではあります。

これらを契機に段々と一つ自治体も一つと統合というような線へ持っていけられることが望ましいと思います。

矢沢古里 それから家の無い人、あるいは移住する人、そういう人の為に市では住宅対策を行ったのと、職を与えるための職業訓練所の建て増しについて菅沼さん、お願いします。

菅沼徳門 すぐに流れてしまって明日から住む所が無いということでしたから災害救助法の適用によってご承知のように赤穂も原垣外と飯坂に住宅団地を作ることにして早急に仮設住宅を作ったのであります。そしてすぐ建てましても離散した者が家こそ入れても職が無いということでありましたから原垣外へ直に県が職業訓練所を造ってそこへ収容し早いこと職を与えるという訓練をして職に就かせるという方を講じたわけです。

仮設住宅は本当の仮設でわずかにバラックだけの物もあったが、その中もいろいろで今度は県がお金を貸してくれ、そしてそれを県から買い取るというブロックの住宅もありました。いろいろな市にもありましたけれども、とりあえずは仮設住宅の45戸を造ったのです。その中に四徳も入ったのです。

その後の復興でだいたい集団移住というのは日本中で初めて出来たケースでありこの災害については特出される事ではなかったかと思っております。そこで集団移住を行うにつきまして土地の買い上げをしたのであります。その買い上げがだいたい田は15町、畑が6町、宅地が4千坪と総買い上げ価格が2531万円と巨額に上りました。

ご覧のようにその後には、再び災害が起きないようにと買い上げられた土地に、県有地の票札が今かかっております。その後の復興でございますがこれに要しました費用は災害救助法の

適用により全額、国、県が負担をしたのでございます。ご承知のように、鹿島建設、村上建設等と中央の大会社が来て主として復旧を行いました。見たこともない様な大きな機械が入り着々と復興され39年の5月で一応復興作業が終わったのであります。

ただ営林局の砂防関係がまだ10年間でありまので残っておりますが、中川治山事務所の仕事が残るだけで後はひとまず片付いたわけでございます。それに要しました全部の費用は28億1千5百万円。建設関係それから農林関係いっさい治山の関係を含めまして28億でございます。その中で市はわずかに8%で1割にはなりません2541万の資金が市から出されております。したがって大変な復興でしたが市税の増徴をしなくて何とか賄っていけられたのはこれも国県のおかげで大復興が早く成功したのでございます。中川治山事務所を中沢に置いていることは中沢にとってはプラスでございました。

矢沢古里 最後に10周年の記念事業が近く行われるようになってきているようですが、そこで災害が一番市になってからの大きな仕事だという事で建碑の碑を建てるといような試みが決められたそうですが、その状況の説明をお願いします。

菅沼徳門 実はいま司会者からお話がありましたように市政の7周年記念を行おうと計画をした時が36年の水害の3日前に議が持ち上がって計画を立てていたのでございます。そこへ水害にあいましたものですから全くの流れでそのままになっておりましたが今年が10年になります。復興も今年の5月で一段落したのと市の記念行事と合わせて災害の復興祭を一緒に行おうと計画がされて7月13日に行われることになっております。

そこで復興記念碑を建てようということで災害碑を記念する為に中沢の河川の中からあれだけの大きな岩が流れてきましたので何かあるだろうと石材を探してみたのですが、やはり適当な碑にするような石材は無いという事で、大石は大田切の切石から碑の方は中田切から持ってきました今着々と復興碑をこしらえているとこ

ろでございますが今月いっぱいには建たる予定
であります。

新宮川の橋の川で言うと左岸ですが東側、そ
こに堤防と護岸と道路が竹藪の下のところ元の
竹村又吉さんの家の後ろに堤防へかけて東へ敷
地を造って立派な物を建てるということでした。
どの位かかりますか。だいたい市は30万だけで
ございましたが関係をいたしました建設業者の
衆のご援助を得て総工費は60万の余をかかると
思います。除幕式は7月13日の午前現場で行
われるということでございます。

竹村長彦 それについてやはり博物館の方で
記念として災害誌を発行するということになっ
て市会で10万ばかりで記念すべき後へ残る災害

誌を拵えろということになりまして、もっか編
纂中ですがこれは有線でもしきりにお直しくだ
さったので未曾有の災害を受けた記念をすべく
250円ですので是非中沢地区の方たちに沢山買っ
て頂きたいと思えます。よろしくお願ひします。
矢沢古里 それでは非常にその当時から関係の
深かった方達においでを頂いて短い時間であり
ましたが災害の回顧、その後の状況、復興の状
況とお話をいただきました。更にこの大災害の
犠牲となられました双山さん一家、五柱のご冥
福と心ならずも郷里を離れて住まなくてはなら
なくなりました多くの方々の将来、ご幸福をお
祈りいたしましてこの座談会を終わりにいたし
たいと思えます。ありがとうございました。

第三節 災害当時の有線放送電話施設

三六災害当時の有線施設は線路は栗腕木柱の
鉄線。1回線当りの加入戸数は20戸余の共同利
用方式。電話は戸別音声呼出方式。放送通話は
一日の番組時間表により全村にラジオ放送や行
政などのお知らせ、地域のニュース、自主番組
の放送という仕組みでした。

従って1ヶ所故障が起きるとその回線全部の
放送、通話が不通となりました。

災害の当日は、朝から夜中にかけて、南洞、
北洞、落合、新宮川岸回線、それに中山・大曾
倉回線、そのほか新宮川近辺の戸別災害も含め
て施設46回線1000戸の内、16回線約350戸が故
障で不通となりました。

明けて翌日からは復旧応急工事で発電所上の幹
線流失の為、北洞地域へ1回線のみ道端や土手沿
いに這わせ蚊の鳴く程度の応急措置をしました。
引込線などの資材が調達できず、町の電気店に足
をはこんだり、緊急の手を尽くしました。

7月1日に自衛隊の割当がなり2班16名が応
援で、北洞回線を除き応急措置を約一週間で終

了しました。その後の復旧工事には、菅沼の
■■■■ (■■■■) ■■■■ (■■■■) ■■■■ (■■■■) ■■■■
■■■■ (■■■■) さんの約一ヶ月の応援を得て完
了しました。

又北洞の柱調達では、菅沼、■■■■ (■■■■
■■■■) さんが寄付をして下さいました。

復旧工事は約150万円がかかり、その後災害地
域を主体に改修工事が行われ2年半の年月がか
かりました。災害当日については“濁流”文集に
掲載しました。

●三六災害時の交換手の記

- ① ■■■■ さん 赤穂在住
(現滝沢・中山・和手出身)
- ② ■■■■ さん 赤穂出身
(現竹村・下割出身)
- ③ ■■■■ さん 中沢在住
(現下島・菅沼・横山中出身)

●中沢有線放送、電話施設の歴史

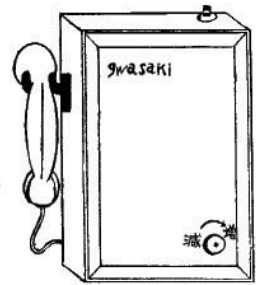
この施設は昭和34年3月、国の新農村建設補助(200万)、中沢財産区議会から中沢地区全戸加入を条件に(200万) 施設主体となる中沢農協(200万) 加入者個人(200万)。約800万円の総公費をもって、「中沢農協放送協会」として、全

村放送と各戸通話可能な放送電話を兼ねた施設として発足しました。その後、駒ヶ根3共同施設協会、駒ヶ根有線放送農協(昭45年3月)を経て、平成6年4月、現在の株エコーシティー駒ヶ岳となった。



災害の状況と支援を訴える有線放送、頻繁に通話交換の取り次ぎをした。中沢農協

有線放送用テレホン
スピーカー



●三六災害による有線放送電話施設からの脱退者・移設者・休会者一覧表

(昭和36年7月1日から昭和38年1月31日迄の期間)

集落名	有線電話番号	氏名	屋号	脱退等の年月日
上 割				36・9・29脱退
				26・12・7 "
				37・5・19 "
				37・10・29 "
				36・11・15 "
				37・10・15 "
				37・2・28 "
				36・12・9 "
				38・3・10 "
				36・12・27 "
				36・12・31 "
				36・10・28 "
				36・10・28 "
				37・8・1 "
				37・11・10 "
				37・11・10 "
				38・1・20 "
				36・11・5 "
				36・12・16 "
				38・1・20 "
	37・12・22 "			
	37・4・7 "			
	36・7・1 "			
	36・7・15 "			
	36・7・15 "			

				36・7・25 "
				36・8・1 "
				36・8・2 "
				36・8・7 "
				36・8・29 "
				36・9・8 "
				36・9・8 "
				36・11・12 "
				36・12・1 "
				36・8・5 "
				36・8・24 "
				36・8・24 "
				36・10・28 "
				37・1・22 "
				37・2・1 "
				37・8・20 "
				36・12・16 "
中山				37・5・9 "
原				36・9・2 "
				36・11・12 "
				36・7・27 "
				36・8・29 "
				36・9・2 "
				36・9・2 "
				36・10・23 "
				36・11・12 "
				36・11・12 "
				36・12・6 "
				37・3・6 "
下割				36・8・17 "
				36・11・12 "
				36・11・27 "
中割				37・5・1 "
				37・12・4 "
脱退合計	59台			

集落名	有線電話番号	氏名	屋号	移設年月日
上割				37・8・3移設
				36・10・27移設
				36・9・10移設
				36・11・16移設
				37・5・14移設
原				36・10・20移設

集落名	有線電話番号	氏名	屋号	移設年月日
原				36・12・27移設
				37・3・27移設
下割				36・9・3移設
				36・11・9移設
移設合計				10台

集落名	有線電話番号	氏名	屋号	休会年月日
上割				36・9・3休会
				36・12・6休会
				37・5・9休会
中曾倉				36・12・16休会
原				36・12・16休会
休会合計	5台			

第一節 自衛隊の救援活動

1. はじめに

昭和36年6月下旬伊那谷地方一帯は梅雨前線の影響により、時間40m/m以上の集中豪雨を受け新宮川、百々目木川を中心とする河川が氾濫し山崩と共に大きな被害が発生し、自衛隊を始め全国各地からの救援活動が行われた。

6月28日災害対策本部が設置(隊長 北原駒ヶ根市長)され災害に対する「災害救助法」が午後6時50分発動される。

西沢知事、相沢局長ら午後9時来市、市長から災害救助のため自衛隊の特派について懇請、県が要請した自衛隊が30日出動となり救助と復旧活動が始まりました。

6月28日 災害対策本部設置、災害救助法発動(PM6:50)
自衛隊特派申請



6月30日 自衛隊高田隊普通科 340名
(隊長 二等陸佐 大塚恭一指揮官)



7月1日 自衛隊朝霞駐屯部隊第1建設第102大隊 60名
(隊長 二等陸佐 西村武雄指揮官)



7月6日 自衛隊朝霞駐屯部隊第102大隊 40名(増員)



7月10日 自衛隊朝霞駐屯部隊第102大隊 260名(増員)
自衛隊松本駐屯隊 41名
この日高田隊全員帰還する



7月12日 松本駐屯隊 41名帰還する



7月16日 朝霞駐屯部隊第102部隊 全員帰還する



7月26日 松本自衛隊音楽隊 災害地慰問演奏 来市

2. 活動のあらまし

自衛隊は人命救助、行方不明者の捜索に全力を注ぎ、交通遮断による孤立化している部落への連絡、救助物資の補給、道路、橋梁、通信施設、電力等の復旧、

ヘリコプターによる救助活動など活躍される。

○高田部隊(340名)

6月30日高田部隊340名は中沢中学校に到着し、二大隊に別れて落合、唐山方面と百々目木、新沢方面に別れて活動する(一部は新宮川部落へ)行方不明者の捜索、桜渡橋の復旧、人道の開設(大洞、百々目木、猿沢、桃平から又折草峠まで)水源地復旧(高沢、東伊那簡易水道、中沢簡易水道)通学路の開設(南分校、落合より東分校)新宮川岸部落及新沢等住宅の土砂出し、取りこわし、有線、電灯、復旧救援物資の輸送、農業用水路(菅沼土地改良区、落合水路)の復旧等活躍。7月9日任務完了。7月10日中沢中学校校庭で感謝状の贈呈式が行われ多大の功績を残して帰還される多くの村民が参集し、感謝に燃えて見送る感激のひとつときであった。

○第102建設部隊

○松本駐屯隊

7月1日朝霞建設大隊60名東伊那公民館に到着。新宮川岸橋架設に着手する。第102建設部隊は重機を駆使して南海橋の架設、河原の土砂を押し上道路開設(巾40米)に着手。7月6日には40名増員となり、新宮川橋架設堤防復旧。7月10日には260名増員となり又松本駐屯隊より41名来市。70名ほどは新宮川岸へ、290名ほどは南海棧道、南海橋架設、堤防工事と重機が活躍する。7月11日新宮川橋架設、堤防(応旧)完了。

7月15日南海橋架設、完成。市長、議長によりテープカットされ自衛隊300名余、車輛30台余、一般村民ら渡初を行う。

この日、第102部隊任務完了。東伊那小学校校庭で感謝状贈呈式が行なわれ、小学生ら対面隊形で送る感激の壮行式であった。

○空輸部隊

ヘリコプターによる活動はめざましく松川町、松川中学校を基地に、中沢中学校校庭を前線基地(中沢被災地用)物資輸送等、積み込んで飛び立った。

3. おわりに

自衛隊の最終引揚は7月16日であった。

中沢中学校体育館、又東伊那公民館、小学校で寝泊まりし、活躍された。自衛隊と共に民間の団体の活動も復旧への大きな「力」となった。

消防団、婦人会(日赤奉仕団)、青年会、市職員、等の皆さんと学生の参加もあった。信州大学農学部300人、上伊那農業高校生225人、赤穂高校生150人、市連合青年団80人、箕輪町青年団60人、東京都戸山高校生9人(人員は延人員、上伊那地方事務所編「濁流のあとから」)自衛隊を中心とした救助活動であった。

参考資料 駒ヶ根市誌(現代編)
駒ヶ根の災害誌(1964年版)
語り継ぐ災害の記録から(昭和56.6)
中沢学校百年誌

(青木 記)



第二節 中沢簡易水道

昭和36年当時の前年に敷設された中沢簡易水道(永見山、中割、下割、菅沼)以外は個人や共同の井戸が主力で、山間地などでは湧水も利用されていた。

中沢の簡易水道が新設されたのは三六災害の前年、昭和35年であった。当初は東伊那も含めた竜東上水道が計画されたが(昭和30年)受益者負担の調整がつかず、東伊那が単独で先行、中沢は数年遅れて南入の地下水を水源としてつくられ、計画人口は2,400人であった。

三六災害では下間川水系があまり被災せず、中沢簡易水道も大きな災害はなかったが、新宮川岸の簡易水道は2系列の内、一つが壊滅した。災害時には残った一つを全戸で利用するとともに、天竜川の対岸、下平から天竜大橋を渡った仮設水道で対処したが、真夏の炎天下でのむき出しの配水管は、生ぬるい飲み水となった。新宮川岸は災害後新たに中沢簡易水道に編入した。また、上割などの被災地では個別の水利もほとんどが壊滅した。

災害以後は、新宮川発電所が流失したのを契機に、その導水路も使って新宮川(落合地籍)に水源を求め、中曾倉の扇場地籍に配水池を設けて東伊那の簡易水道と統合し、竜東簡易水道として再編された。これによって中曾倉の一部、本曾倉、原も給水範囲となり、東伊那の水不足も解消された。もし、発電所が再開されていたら竜東簡易水道も違った形にならざるをえなかったと思われる。

第三節 新宮川発電所 その歴史と災害

中沢村(当時)に電気が灯され村民の生活向上に大きな役割を果たしたのは、村営電気事業であった。大正初期に村での論議が起き、難儀した財源も五ヶ部落の山林収入からの寄付金を主財源に大正7年に着工、同10年に完成した。小さな村の起業は「提灯の入らない村」として県下の先鞭を切った。当初は南海地籍の対岸から取水、約430メートルの木樋(幅2尺、深さ1尺7寸)で送水、出力50kwの小さなものであった。その後大正13年に取水位置を落合まで引き上げ、コンクリートの導水路(内径2尺5寸)として、出力は150kwに3倍加した。

この村営電気も戦時中の統制令で中部配電に吸収され、以後中部電力となり、昭和36年の災害まで運営されていた。三六災害では新宮川の氾濫で取水部とともに発電所本体も壊滅した。同時に上割地籍を中心とする各河川沿いの電柱や配線も流失により大きな被害を受けた。

第四節 三六災害の被害状況

●三六災害人及び家屋の被災状況(中沢)

人的被害	死亡	上割(5名)	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	重傷	上割(1名)	■■■■■			
	軽傷	上割(3名)	■■■■■	他2名		

被災状況	部 落	氏 名	氏 名	氏 名	氏 名	
流失 計38戸	家屋 計31戸	上割(26戸)				
		下割(2戸)				
		中山(1戸)				
		中割(1戸)				
	本曾倉(1戸)					
	非住家 計7戸	上割(6戸)				
		吉瀬(1戸)				
全壊 計39戸	家屋 計33戸	上割(9戸)				
		原(19戸)				
		下割(4戸)				
	本曾倉(1戸)					
	非住家 計6戸	上割(5戸)				
		中山(1戸)				
半壊 計31戸	家屋 計31戸	上割 (20戸)				

半壊 計31戸	家屋 計31戸	原(9戸)	
		下割(1戸)	
		中割(1戸)	
床上浸水 計5戸	家屋 計5戸	上割(1戸)	
		原(3戸)	
		中曽倉(1戸)	
床下浸水 計8戸	家屋 計8戸	上割(2戸)	
		中山(2戸)	
		永見山(2戸)	
		吉瀬(1戸)	
		大曽倉(1戸)	

●地区外の被災状況

東伊那	家屋全壊	(1戸)	
	床上浸水	(1戸)	
	床下浸水	(5戸)	
赤穂	床下浸水	(2戸)	

第五節 三六災害で中沢から移住された方

氏名	移住先
新宮川岸	
	下割 第6常会
	神奈川県 現在は宮田
	下割 第6常会
	東伊那
	赤穂 町3区
	赤穂 飯坂
	赤穂 原垣外
	赤穂 原垣外
	赤穂 原垣外
	赤穂 原垣外
	赤穂 原垣外
	赤穂 原垣外
	赤穂 赤須東
	下割 第1常会
	東京
	赤穂 下平
	赤穂 原垣外
	赤穂 原垣外
赤穂 上穂栄	
下割 第1常会	

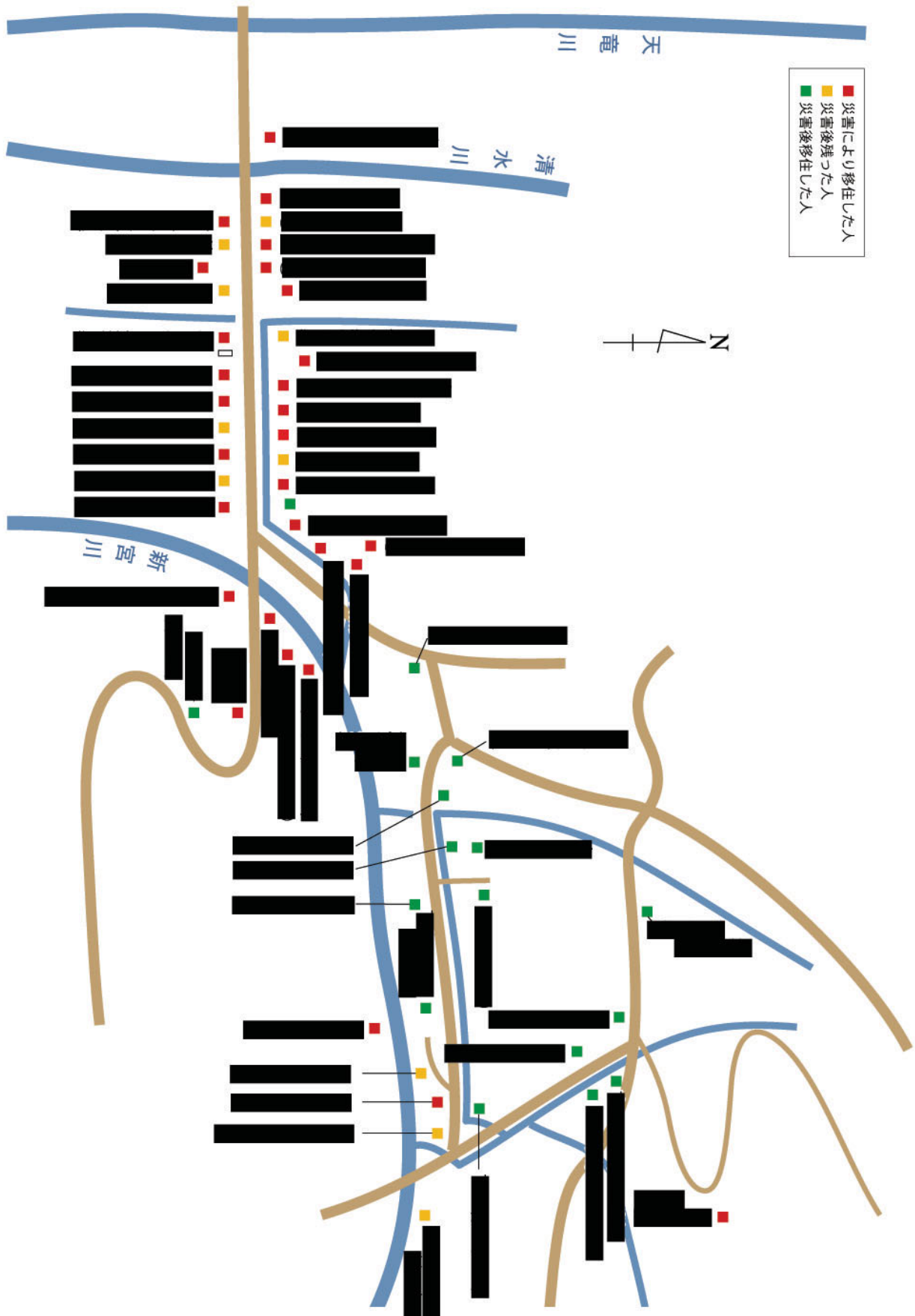
氏名	移住先
	赤穂 飯坂
	原 第1常会
	原 第1常会
下割	
	下割 第1常会
	赤穂 原垣外
	赤穂 原垣外
	赤穂 飯坂
	下割 第6常会
上割北洞 大洞	
	赤穂 福岡
	赤穂 町3区
	赤穂 北割1区
	赤穂 原垣外
	赤穂 福岡
上割北洞 唐山	
	赤穂 市場割
	赤穂 町2区
	中沢 中割
	赤穂

氏名	移住先
上割北洞 猿沢	
	伊那市 西春近
	赤穂 小町屋
	伊那市
上割北洞 李平	
	中沢 下割
	赤穂 町3区
	赤穂 町2区
	赤穂 町2区
	赤穂 町2区
上割南洞 大松尾	
	赤穂 町3区
上割南洞 桃ヶ平	
	中沢 上割
	赤穂 原垣外
	赤穂 福岡
	中沢 中割
	中沢 上割
	赤穂 上赤須
	赤穂 原垣外
	赤穂 市場割
	赤穂 市場割
	赤穂 中割
	赤穂 小町屋
	赤穂 福岡
	赤穂 北割
	赤穂 町2区
	上割 桃ヶ平
	赤穂 飯坂
	中沢 上割
	赤穂
赤穂 市場割	
赤穂 福岡	
赤穂	
赤穂	
赤穂 下平	
赤穂	
上割南洞 新沢	
	上伊那郡 箕輪町
	赤穂 町2区
	中沢 下割
	赤穂 北割2区
	赤穂 北割2区
	上伊那郡 箕輪町

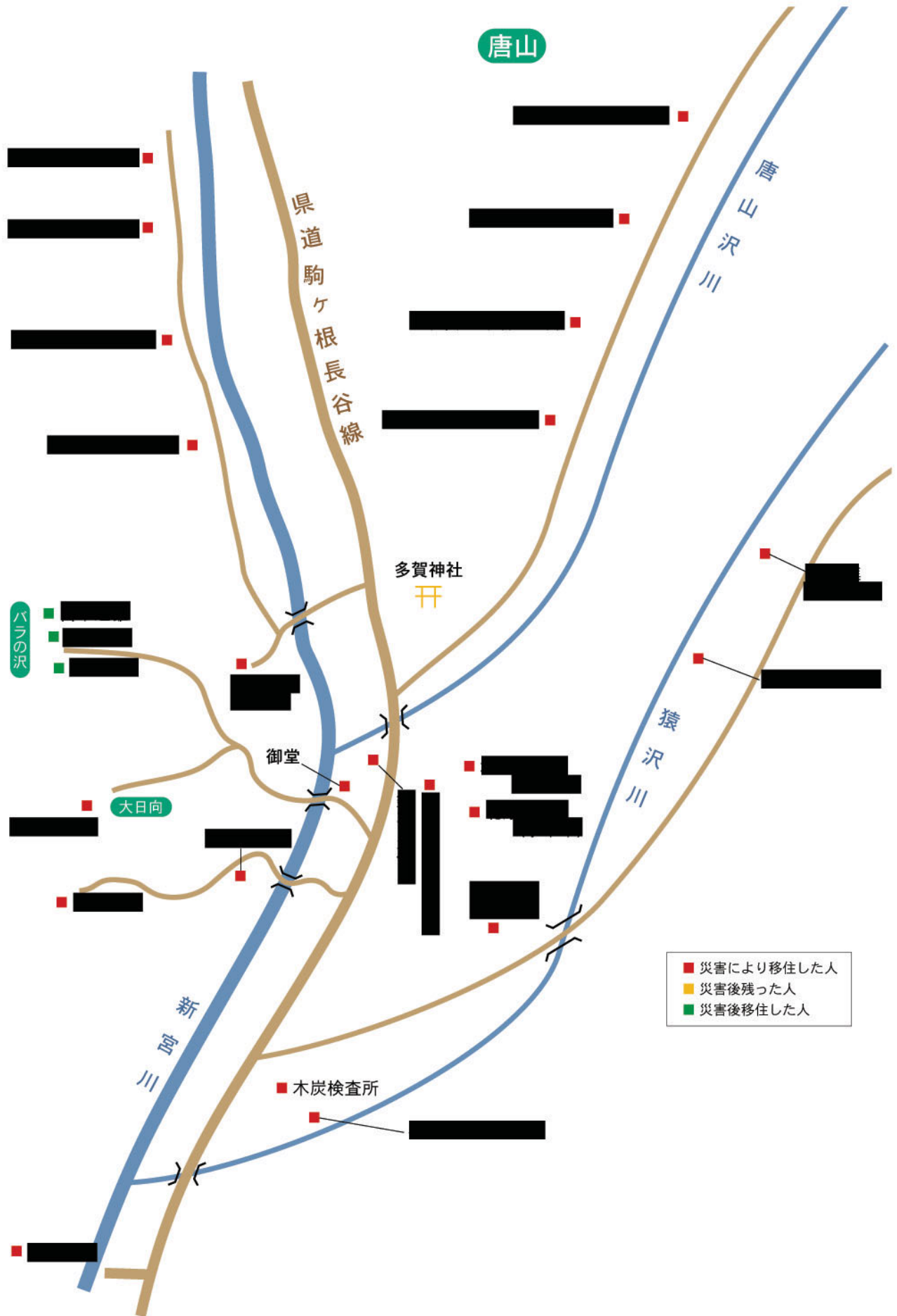
氏名	移住先
上割南洞 早草	
	赤穂
	赤穂 町2区
	東京
	東京
	赤穂 町2区
	赤穂 町2区
	東伊那
	東伊那
	赤穂 原垣外
赤穂 町2区	
上割南洞 百々目木	
	赤穂 上穂北
	中沢 上割
	上伊那郡 宮田村
上割南洞 西光	
	赤穂 北割
	上割 西光
	中沢 下割
	赤穂 飯坂
	赤穂 福岡
上割南 大坪・中曾倉・道平橋	
	赤穂
	東京
	中沢 菅沼
	中沢 上割
東京	
上割北洞 落合	
	中沢 中割
	上割 南海
	東京
	中沢 菅沼
	赤穂 町2区
	赤穂 原垣外
	中沢 下割
	赤穂 原垣外
	赤穂 原垣外
	愛知県
	赤穂 町2区
	東伊那 栗林
	赤穂 福岡
	赤穂 原垣外
	上割北洞 南海
	中沢 本曾倉
	中沢 菅沼
	赤穂 市場割

第六節 三六災害時の家屋と移住された方

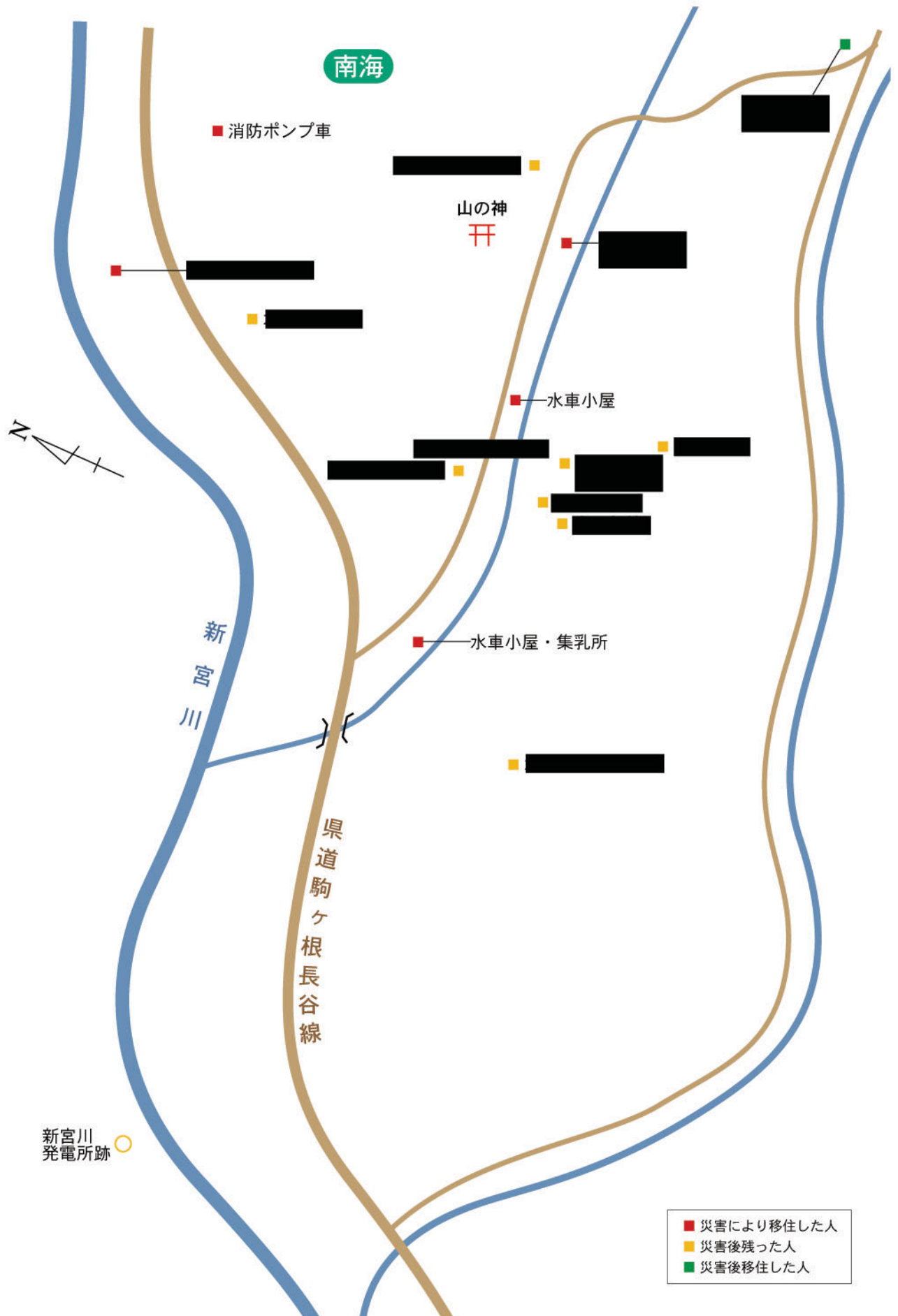
I 新宮川岸（原第二・原第三）下割の一部



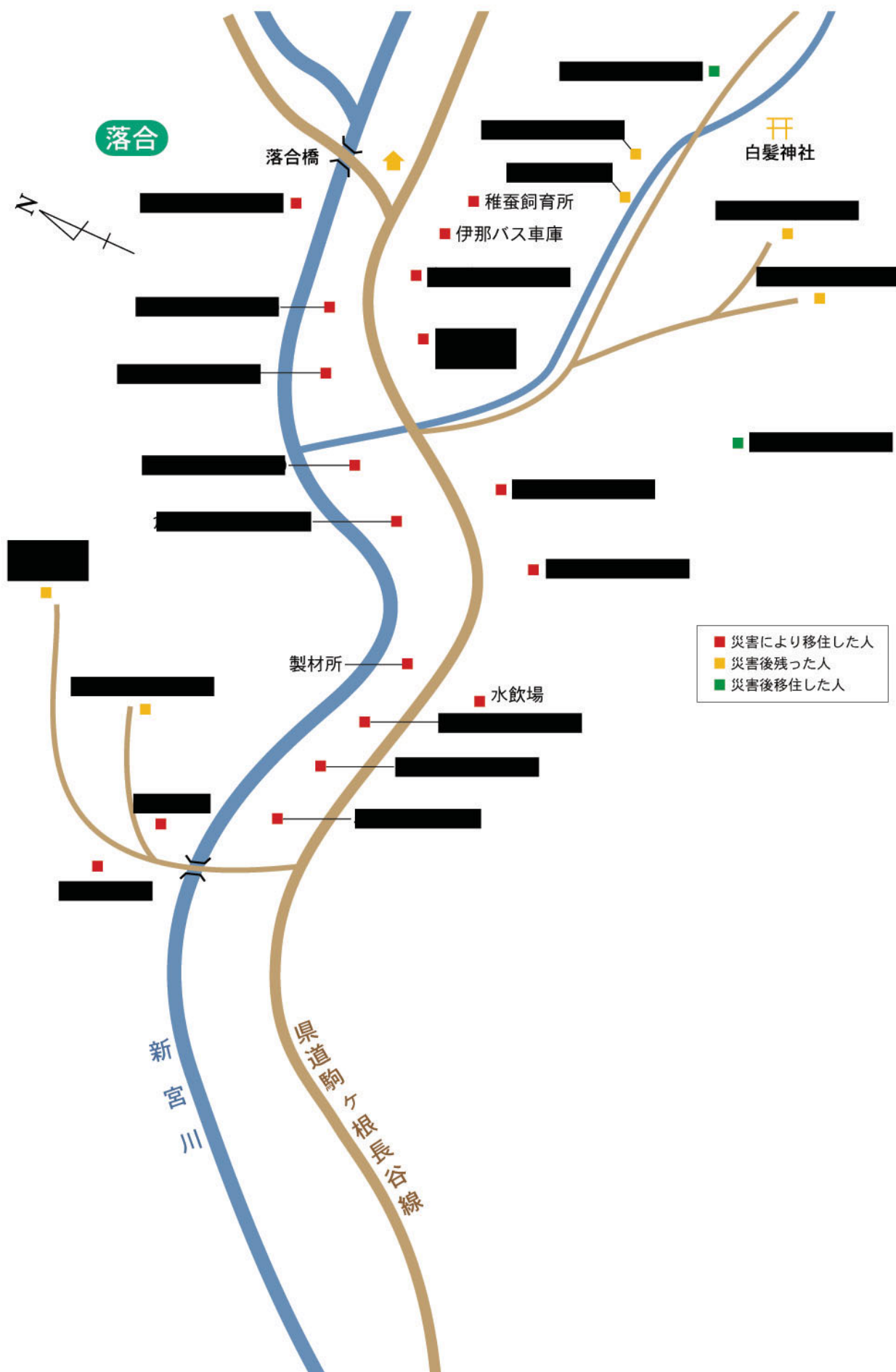
II 上割 北洞 大洞



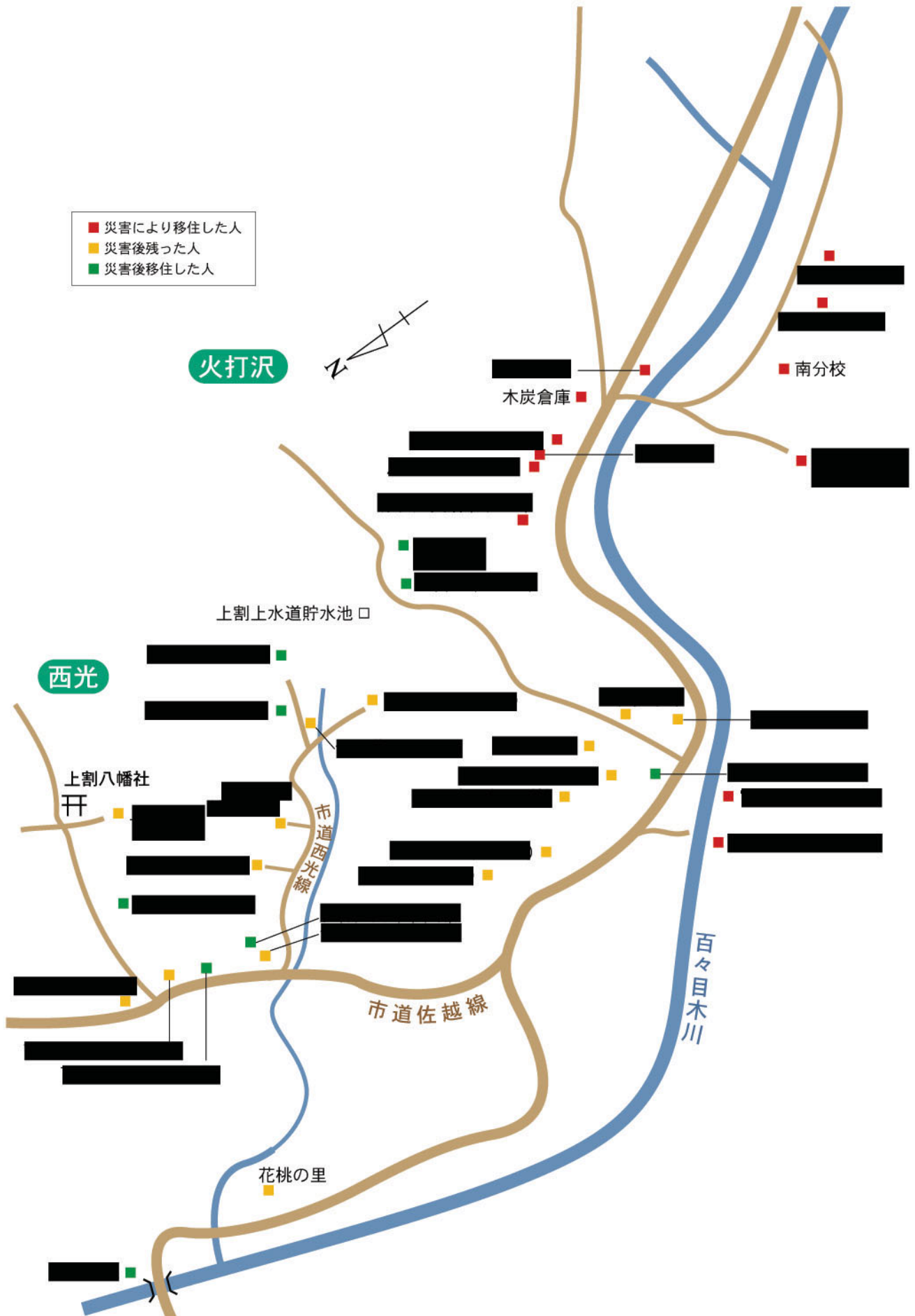
III 上割 北洞 南海



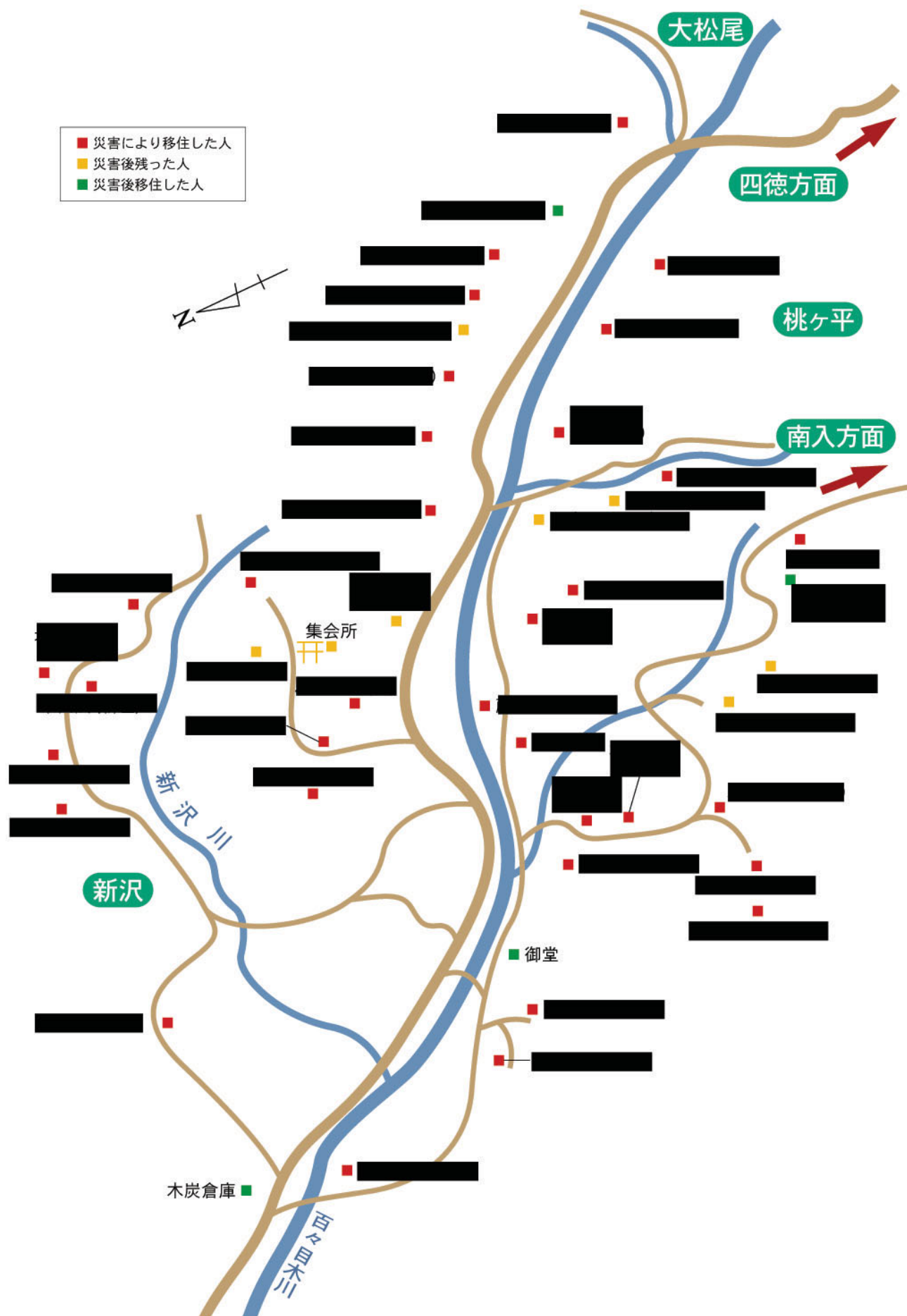
IV 上割 北洞 落合



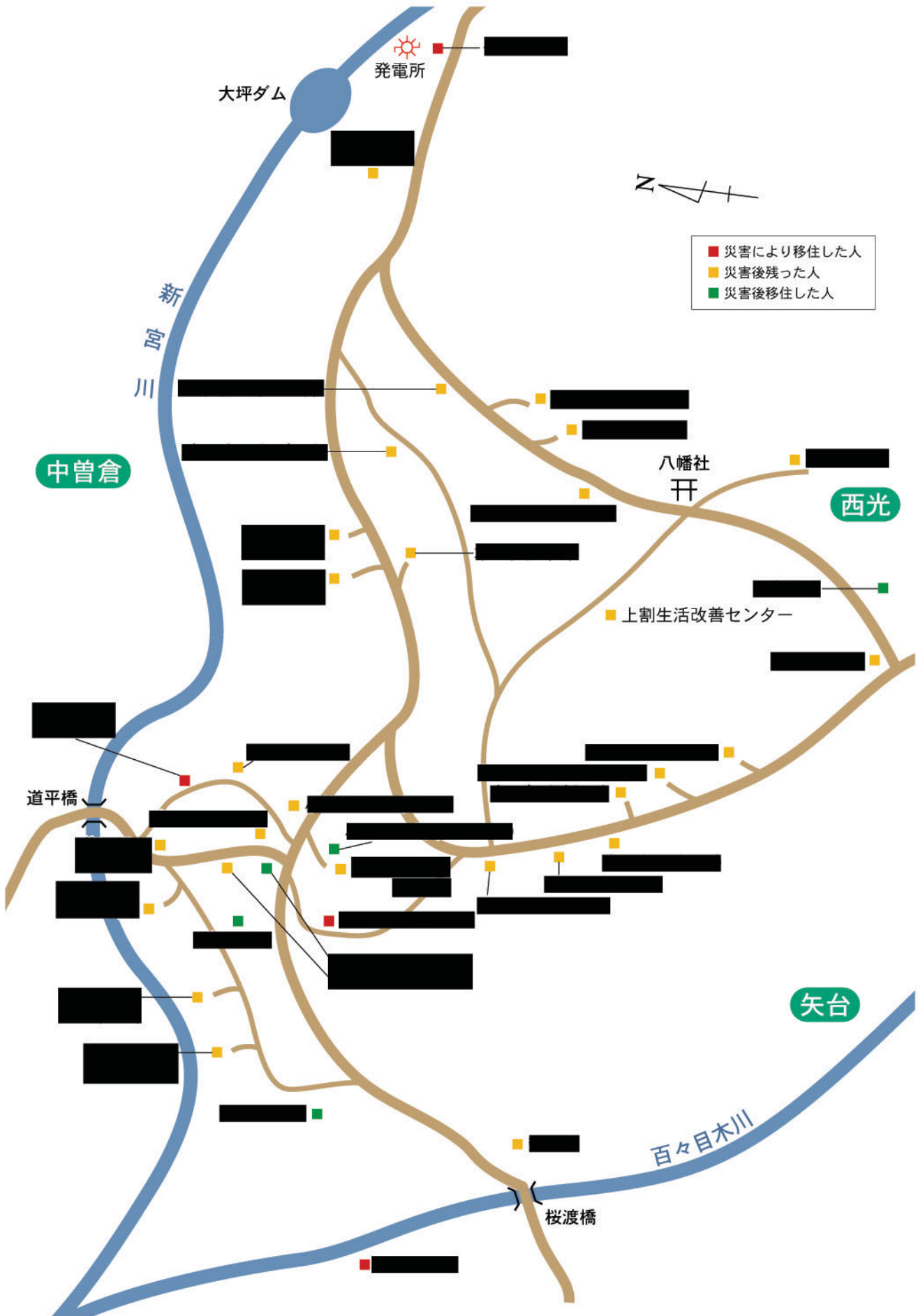
V 上割 南洞 桃ヶ平・早草



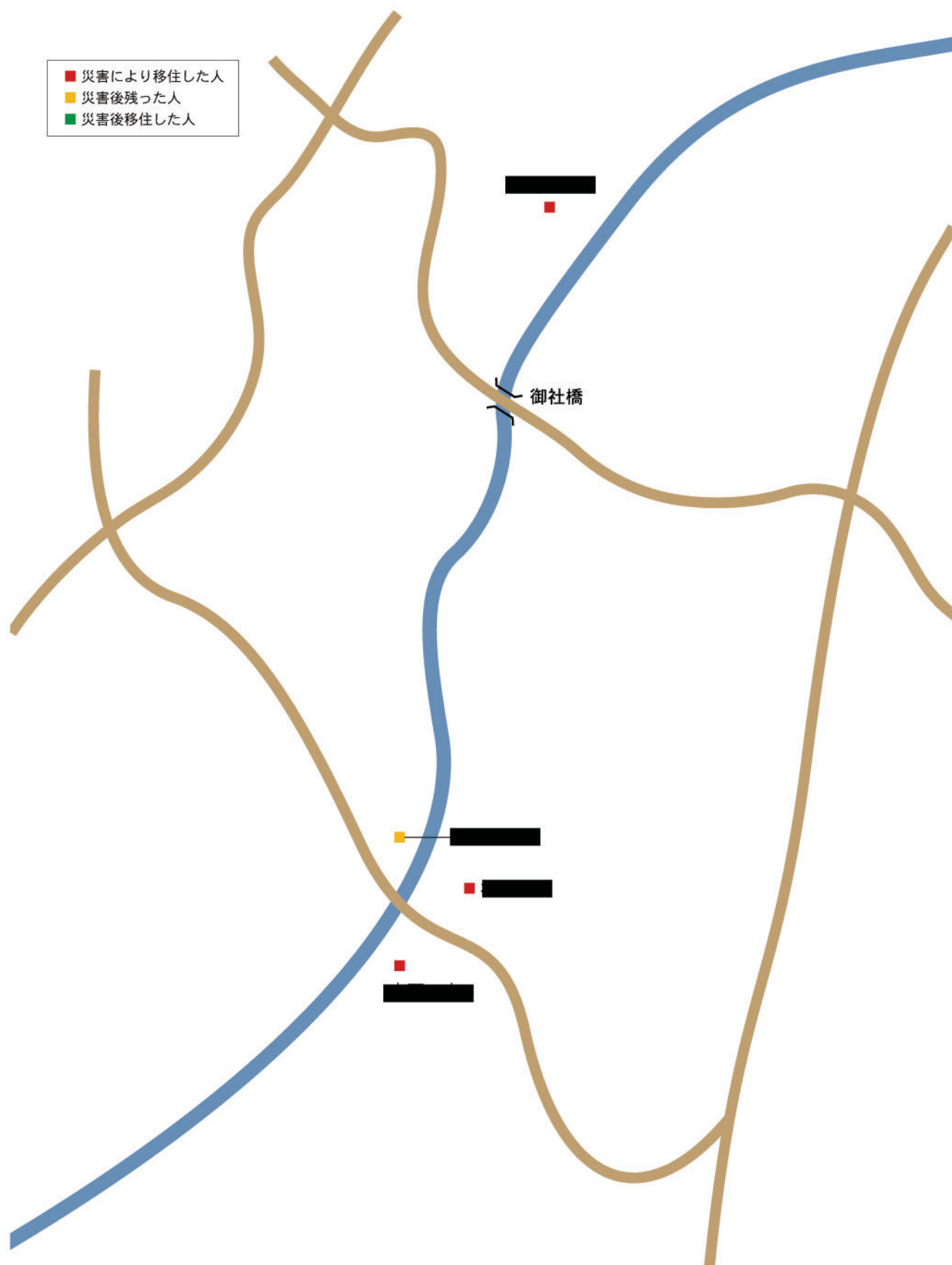
VI 上割 南洞 百々目木川



VII 上割 南洞 大坪・中曾倉・道平橋



VIII 本曾倉 下曾倉 下割



IX 村を変え、農業をすい退させた三六災害

志賀 博

(一) 農業がすい退すれば、村は変わる。

国土交通省はかつて、平成六年の時点で292の集落が消え去ったと報じた。又、これから10年以内で85の集落が無くなるだろうと推測している。おそらく現在では2,500以上の集落が消えているだろう。これに機能を失った“限界集落”を加えると、10,000ヶ所の集落が姿を消しているのではないか。

原因はいろいろとあろうが自然災害によるものが多い。こうした集落の主な産業は農業や林業であり、関連する産業を含めるとこのような自治体では大きな影響を受けることになるだろう。ことに農業のすい退は消費者に関係しているだけにはかり知れないものがある。

こうした現象は他人ごとではない。中沢でも引き金になったことが起きたのである。

それは今から50年前の三六災害である。

(二) 災害で変わった村の農業

昭和36年6月、南方に発生した熱帯性低気圧は台風6号となって大鹿、中川(四徳)、中沢を直撃した。中沢の被害もひどいものであった。一級河川の百々目木川、新宮川、それに下間川に山間地の支流が流れこんで大洪水となった。中でも上割部落はさんさんたるものであった。生命を失った方もおり、人家の流失、道路、水路の分断、田畑の流失は今まで体験したことのないものであったのである。更に人々にあたえた精神的な打撃ははかり知れないものであった。当時の記録によると、農業面での被害は、水田70ヘクタール、畑57ヘクタール、それに桑園6.7ヘクタールとされている。更に上割北洞に設置されていた稚蚕飼育所の流失は養蚕農家にとって致命傷であった。養蚕は中沢の基幹産業であったからである。農業での被害を分析すると、米で2,000万、まゆで1,800万、園芸作物、尚、林産物(木炭)など農協取扱い高の30%およそ7,800万円が災害によって減少している。加えて

特筆すべきことは翌年37年に組合員が1,000を割り、895人、38年には847人となり農協の基盤をゆるがせている。(注 数字は中沢農協総会資料37、38年による。尚、36年資料は無いので推計したものである。)

(三) 災害を風化せず農業の再生に向けて

私達は災害でさまざまなことを学んだ。これを風化せず更に検証して農業、中沢の再生に向けなければならないと思う。

災害は想定なしにやってくる。手落ちはないか念を入れる必要がある。そして何よりも大事なことはここ中沢に住む人達がここを定住の地と定め、強いふるさと意識をもつことだ。毎年、入学する一年生が20人前後となったと聞いている。私達の頃は分教場だけで20人はいた。人の力ではどうにもならないことがある。けれど人の力でこれをのりこえなければならないのである。

農業の再生にしてもそうだ。現在、地域づくり委員会、中沢生産組合の方々によって中沢のいろいろなメニューが検討されているようだ。敬意を表し更なる推進をお願いしたい。

一つの事例であるが参考になればと思う。当時中沢農協に在職していた私達は、災害後の農業の振興に取りくんだ。その結果、まゆ、トマト、こんにゃく、形状が丸いので「三玉運動」としてすすめてきた。まゆは人と同居する飼い方はやめパイプハウスによる方法を取り上げ30基に達した。収量も10万キロに及んだのである。トマトはみつおか、みすずと肩を並べ県下の三大産地となった。農協構内に送果場を設置することが出来た。二つ共時代の流れによって姿を消したが、こんにゃくは難しかった種子の貯蔵も電熱貯蔵によって改善し、新宮川岸に加工場も設置した。

後つぎもあって下伊那のやすおかについて健在である。新しい構想力、それに手だてがあれば結果はついてくるはずだ。

新しい芽が生れ、育つことを私は心より念じている。

(参考統計)

年度	人口(人)	農協 正組合員(人)	農地(ha)			JA 農産物扱		付 記
			水田	畑	計	未出荷俵数	全扱額(千円)	
昭16	5,230		318.0	269.0	587.0			中沢村政要覧 JA 資料より
23	6,068	1,007	280.3	256.9	537.2	7,560		" JA 創立の年
35	5,020	985	357.0	219.0	576.2	19,831		農林業センサス
36		912				17,261		JA 資料 36災の年
37		895				19,222	314,002	"
40		824	349.0	178.0	527.0	19,013	359,974	農林業センサス JA 資料
45	4,146	796	365.0	186.0	551.0			
平22	2,962	635	260.4					生産調整資料より

X 三六災害と交通

1、道路と橋の状況

この災害で中沢の道路網はほとんど壊滅遮断された。赤穂からの天竜大橋は辛くも残ったがその先の新宮川岸の道路は埋没した。新宮川橋、下曾倉橋、大津渡橋、堂平橋、落合橋、矢台橋、板橋、ひきのたばし等々新宮川と百々目木川にかかる橋はことごとく流れた。

しかしお社宮司橋、松木平橋、桜戸橋は助かった。不思議に大曾倉川は雨量が少なく被害は軽かった。外から中沢への連絡は大久保橋、吉瀬橋に頼ることになった。

天竜大橋から新河岸にかけて一面の土砂水没、横吹から落合を含め上流はことごとく瓦礫の河原となった。同じように百々目木川とその周辺は折草峠登り口まで賽の河原と一晩で一変した。

この災害により中川村の四徳はすべて全滅した。赤穂から中沢経由の一日三往復の伊那バス四徳線はこの日から復旧することはなかった。

2、伊那バス中沢線について

(伊那バス 60年史より)

伊那バス中沢線の赤穂－桜戸間の運行開始は昭和15年1月にスタートした。昭和17年頃から戦争直後までは燃料がなく往復回数は少なくなったが戦後は年々増えはじめた。

昭和29年には中沢線14往復になり落合まで延長され、更に10月には大曾倉までのびた。当時は学生と通勤者でバスのドアは開けたまま走る

超満員であり中沢線は伊那バスのドル箱といわれた。

そして31年には待望の四徳線が百々目木経由で開通し、この谷の人々を喜ばせた。

昭和35年政府は所得倍増計画を決定し、農業基本法も制定前年となり日本経済は高度成長期に入った。中沢は三六災害により耕地と山林に多大な被害を受け、以降は日銭稼ぎ等兼業農家が急増加し、人口減と過疎化が進んだ。こうして国民生活の物心にわたる著しい変化が始まった。この中で自家用車を含む自動車の急激な増加が進んだ。中沢地区の統計がないのが残念ですが駒ヶ根市の自動車台数をみると34年に総数で600台、37年には1253台、39年には約2千台、43年には約4千台に増加した。

3、伊那バス流れる

運転手の■■■■さん(新婚の27才)と車掌の■■■■さん(20才)の話による。

6月27日は昼頃小学校の集団下校の子供と大人で満員であった。桜渡橋の下を流れる百々目木川は物凄い勢いであった。発電所付近から南海、落合まで道路は雨水であふれていた。消防団員が落合にいてこれ以上は無理との忠告があり大曾倉、大洞方面の乗客全員降りてもらった。会社へ電話した後バスの駐車場は危なかったので稚蚕所の庭に駐車した。■■■■さんは中山、■■■■さんは大曾倉の自宅へ帰った。家までの道は

そんなに雨水はひどくなかった。

■■■さんはバスが心配で翌朝7時頃中山の風巻まで来て驚いた、バスが見えないばかりか落合の部落がなくなり濁流が流れていた。それでも稚蚕所だけは残っていた。恐る恐る下の方をみると2百メートル位下流に横になったバスを発見した。その足で車掌の■■■さんの家へ行った。その時のことを■■■さんははっきり覚えていて■■■さんが真っ青になりバスが流れてしまったと玄関に立っていた。

風巻の■■■さんによると朝方心配して見に行ったら4時半頃まではバスはあった。しかし見る見る内に土手が欠けはじめてバスは横転して濁流といっしょに流れていった。この災害で四徳までの道路は中沢地域を含め全壊状態であり、■■■さんの運転していたバス一台土石に埋まってしまった。以後伊那バス四徳線の復活はなかった。

4、稚蚕所の先生孤立する

■■■さんの記憶による。

落合の稚蚕所は十王堂、バスの車庫、墓地の隣にあった。

この時期は蚕の上簇で猫の手も借りたいほど忙しかった。上割の北洞、中山、大曾倉を巡回指導する■■■先生(■■■)と■■■先生(■■■)の二名が稚蚕所に寝泊まりしていた。夜になり北側の本流の水嵩は多くなり、南側は大洞からの濁流により孤立してしまった。稚蚕所の場所は二つの濁流に挟まれたが少し小高くなり建物は辛うじて助かった。夜中は物凄い水と石の流れる音で一睡もできないばかりか、いつ建物が流されるか心配で夜明けを待った。

大坪の■■■さんの話で、この夜■■■先生はまだ若いこともあり■■■先生に何とかして逃げないと命が危ないと持ちかけた。しかし■■■先生は落ち着いていて建物までは流されることはあるまい外のほうが危ない、その時は覚悟を決めるさと若い■■■先生を諭したとのことでした。

翌朝になり二人は完全に孤立してしまいましたが屋号■■■の■■■さんの方々が握り飯を手ぬ

ぐいに包み、川越しに投げてくださいって空腹を凌いだと話された。その後午前10時頃中山側から消防団と■■■さん(■■■)がロープを持って決死の川渡りで無事二人を救出した。

■■■さんによると■■■さんは棒高跳びが得意でこの時はロープを体に結び、川の中へ棒をつき中州へ渡ったと話してくれました。

■■■さん方へ電話をかけてみました。奥さんと思いましたが、■■■さんは二年前に無くなったとのことでした。三六災害の時は恐ろしかったが中沢の皆さんには本当に親切にしてください楽しかったと口癖のように語っていたとのことでした。記録集のことを伝えますと中沢の方々へご無沙汰しましたがよろしくお伝えくださいと伝言がありました。

当時の方々に話しを聞くなかで地域の人々の結びつきの深かったことに感服しました。今回、協力いただいた方はその都度お名前をあげておきましたが、特に■■■さんには有線放送に勤めていたこともあり当時をよく覚えていて感謝申し上げます。



落合



四徳

(株)伊那バス提供

※著作権保護のため省略 (P78 ~ P99)

I

災害に備えて

駒ヶ根市長
杉本 幸治



昭和36年6月27日、大量の土砂と水が一瞬のうちに伊那谷を破壊し、死者・行方不明者136名、「三六災害」として歴史に残る大災害となりました。私が小学校6年の時でした。翌日天竜大橋の所に行きました。濁流で変わり果てた天竜川沿岸の状況は今でも鮮明に思い出すことができます。早いものであれから50年が経ちました。災害の教訓を風化させないためのイベントを企画した年でした。

そんな中の3月11日に発生しました東日本大震災は、大地震・大津波によります甚大な自然災害と、これに起因する原子力発電所の災害が加わった過去に例のない大災害となりました。大規模災害への迅速な対応、地域住民における助け合いや市町村相互の助け合いの重要性、防災計画のあり方などが問われました。特に、こうした大震災では、国、県は、ただちに機能しないことから、最も身近な市町村が、「自らの地域は自らの責任において守る」との確固たる意志をもって防災対策を進めることの重要性を確信しました。

「三六災害」と今回の東日本大震災と重ね合わせますと、私たちは、この地域の災害の歴史に学び、地域の地形や地質の特性、自然環境を熟知し、自然に対する畏敬の念を持って生活すべきものであり、こうしたことを防災対策の基調とすべきものと考えるところです。

また、先人の皆様からお聞きをします被災当時の行動や、悲しみを乗り越えた復興への取り組みは、大変貴重です。これらを風化させることなく、防災に対する英知の結集として、また地域の財産として後世に伝えていく必要を改めて感じるところです。

そこで、市では防災への備えとして、土砂災害の危険個所や洪水氾濫個所を地図に示した防災ハザードマップを作成し、市民の皆様には危険個所を再認識していただくようお手元に配布をいたしました。また、危険個所に対する治山治水事業をはじめとして、ライフラインの整備、小中学校等避難施設の耐震化をいち早く進め、日頃の対策に努めています。

特に大震災の教訓として、ライフラインの復旧や被災者支援までに相当の時間を要することから、これらを想定した防災計画の見直しや防災資機材の備蓄なども進めています。そして、大規模災害で何よりも重要とされる自主防災会の更なる充実強化などを図り、安心安全のまちづくりを進めて参ります。

市民の皆様のご協力をお願いします。

II

これからの地域防災力の向上をめざして

天竜川上流河川事務所長
蒲原 潤一



今年、東日本大震災、台風12号などが相次いで日本列島を襲い、自然災害は、今なお安全・安心の脅威となっています。当事務所では、河川・土砂災害を未然に防ぐための河川堤防や砂防堰堤などの整備及び災害時の緊急対応への取り組みなどを行っています。

本年、三六災害から50年を迎え、災害の教訓を風化させず、継承するための様々な取り組みが展開されました。当地域では災害体験集の発刊、災害伝承座談会、施設見学会など災害やそれに向き合ってきた足跡を、地域の将来を担う若い世代に伝承する取り組みが精力的に実施されました。ここに関係各位に対し、敬意を表します。

三六災害によって荒廃した新宮川流域では、土砂災害対策及び天竜川本川への土砂流出抑制のため、昭和37年に直轄砂防事業に着手し、厳しい施工環境下で対策を実施してきました。このようななかで、新宮川上流の「唐山沢砂防林」は平成9年から着手し、本年度完成の予定で、当地域の安全性が一段と向上することとなります。

一方で、昨今の社会経済状況下では警戒避難体制の整備などのソフト対策もすすめていく必要があります。そのためには、今般、三六災害50年実行委員会が提唱されたことと重複しますが、

- ① 災害を語り継ぐ記録資料を地域で幅広く活用する
- ② 小中学校や自治会単位で自発的な避難行動に結びつく取り組みを芽生えさせ、継続・定着化させる
- ③ 駒ヶ根高原砂防フィールドミュージアムのような災害伝承と地域の歴史や文化を結合させた取り組みの輪を広げる
- ④ 地域での交流・連携に重きを置いた取り組みを発展させることが重要と考えています。

このたび中沢公民館 三六災害50周年編集委員会をはじめとする関係者の皆様のご尽力により発刊された当冊子は、地域が災害と闘い続けた記憶を留め、後世に伝承する有力な手段となりますし、また河川管理などに携わる当事務所にとりましても、今後の防災に活かす貴重な資料となります。地域を再認識する宝物として当冊子が受け継がれ、地域の防災力を高める活動が一層活発となりますことをご期待申し上げます。

当事務所としては、天竜川上流域の「治水」についての重要性をご説明しながら、地域の安全を守る防災対策施設の整備などを今後とも着実に進めて参ります。引き続きご理解とご協力をお願いいたしまして、祝辞とさせていただきます。

美しい中沢の春

西山が映える 南吉瀬の枝垂れ桜



咲き誇る桃源院の桜



西光の 400年枝垂れ桜



川岸に映える
花桃の里

春の新宮川岸通り



中沢で最古の
蔵澤寺の枝垂れ桜



上の山の枝垂れ桜



谷間に咲き誇る南海の枝垂れ桜



災害から50年の中沢地籍

下曾倉(奈良屋付近)



新宮川岸橋より
下流を見る



新宮川岸



松木平橋付近から下流



桜渡



大津渡橋(香花社をのぞむ)



花桃の里の百々目木川

百々目木





引ノ田 ([redacted] 宅跡)

南分校跡 (板橋から)



大角 (おおがく)

林になった大松尾 住居跡



新沢(ダム)



落合(落合橋付近を上から)



大洞(跡付近)



李平(唐山沢砂防工事)



工事中の唐山入口 李平

唐山(崩れた山をのぞむ)



落合より南海を見る

住む人影もない猿沢地籍



写真及び資料提供者

●写真提供者

矢沢 古里	菅沼 重真	五味 明巳	竹村美智子
北沢 英雄	春日 善三	小林日出男	
宮脇 真	下島 和喜	本多写真館	中沢公民館

●資料提供者

志賀 博 小林日出男

●参考文献

笑顔、キラキラ、天竜川	(天竜川上流河川事務所)
昭和36伊那谷大水害の気象	(天竜川上流河川事務所)
わざわざ、人々のくらしと災害	(天竜川上流河川事務所)
36災害伊那谷災害復旧工事報告	(天竜川上流河川事務所)
語り継ぐ災害の記録	(天竜川上流河川事務所)
伊那谷総合治山事業所36災害記録	(天竜川上流河川事務所)
災害写真データ(CDR)	(天竜川上流河川事務所)
想いおこす三六災害	(社団法人 中部建設協会)
駒ヶ根市誌 現代編	(駒ヶ根市)
昭和36年 出水写真管理一覧	(駒ヶ根市)
駒ヶ根の災害誌	(昭和39年駒ヶ根市発行)
中沢学校100年誌	
写真集中沢の明治・大正・昭和	
三六災害30周年 伊那谷の土石流と満水	(飯田市美術館・伊那谷自然友の会)

●文集名(文の提出)

・濁流(S 36年発刊) ・谷あい 3号 ・谷あい 51号
 ・石献花 5号 ・石献花 6号 ・溪声 36号

三六災害50周年記念誌編集委員

係代表	木下 幸安	春日 善三	市村 好男	
委員	青木 清文	上村 秀一	上村 睦生	小河 香
	北沢 明範	北原 儀平	木下 鉄人	木下 義昭
	小松 重信	下島 大輔	菅沼 重真	竹村 徳典
	竹村 政金	田村 仁志	野村 近彦	林 高文
	堀内 英昭	松原 洋子	宮脇 博一	矢沢 古里
全体のとりまとめ中沢公民館長	山口 久人			
事務局中沢公民館主事	熊谷 清二			

三六災害記念集を発刊して

三六災害から50年を迎え、公民館に三六災害の写真・資料などの問い合わせが在りました。資料を探しましたが駒ヶ根市で発刊している[駒ヶ根市の災害誌]と、災害当時中沢小学校が出された[濁流]が在るのみで三六災害に関する記録集、写真はなく又中沢だけの災害に関する記録は作成していないのがわかりました。

災害以後中沢地区は過疎化がすすみ、若者は中沢を捨て町部に住むようになり少子高齢化が進んでいます。

三六災害以後、力強く生きてきた各地区の皆さまに呼びかけ、共に写真・記録集を作り、あの荒れ果てた地域を復興してきた努力と力を次へと続く皆さんに伝え、災害に対する備えとふる里中沢に対する愛を学び、次へと続く皆さんが、心豊かな中沢・美しい自然豊かな中沢にして頂く事を願い、三六災害記念集を発刊しました。

3月11日に東日本をおそった巨大地震・巨大津波の大災害に三六災害を重ね合わせたとき、そこに住む人々の力強さ、全国各地よりの援助、災害日本の人々の美しい姿を見ることが出来ました。

語りつぐ 中沢の三六災害 あれから50年

平成24年2月発行

編集・発行 三六災害50周年編集委員会

協賛 駒ヶ根市

国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所

駒ヶ根市 教育委員会

中沢公民館

後援 社団法人 中部建設協会

印刷 株式会社 宮澤印刷

問合せ先 TEL.0265-83-3701



1961-2011